

研究

史料と伊能図

二〇一五年

第七十六号

伊能忠敬研究会

THE INOH TADATAKA JOURNAL
STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITING

No.76 2015

国立国会図書館蔵大図 相州大山

(第九九号小田原の一部)

九州第一次測量から戻った伊能隊は約半年後、再び九州に向かう。いわゆる九州第二次測量である。その冒頭で藤沢から大山道に入り大山までのぼってから矢倉沢方面へ抜けた。

理解しがたい名所旧跡訪問である。勘定所は承知していなかったようで、幕府が発した御用状がその間に、伊能隊を追い越すというようなハプニングも起きている。日記をたどってみよう。

文化八年十一月二十九日 朝曇、無程晴。一同大山町止宿出立。一手にて奥不動堂迄測る。相州大住郡大山新町、別所町、福永町、開山町、稲荷町(但別所町より左の方大滝へ追分あり。即小田原街道大滝迄測る。二百三間)。前不動堂。それより男坂、女坂あり。女坂を測る。来迎院にて小休、奥院不動堂迄測る。(大山町止宿より前不動石灯迄十九丁三十八間二尺三寸二分三厘。前不動石灯より奥不動樓門迄九丁三十間二寸二分)。奥院不動堂後に三社あり。一社は蔵王権現、富士浅間、毘沙門天なり。一社は加島大明神、明王大権現、石尊大権現。一社は熊野大権現、山王二十一社、天照皇太神宮なり。山頂に石尊あり。奥不動より登二十八丁。六月二十七日山開、七月十七日迄参詣、奥不動より手分測る。我等、門谷、尾形、保木、甚七、奥不動より初、峠茶屋にて小休、簗毛村揖斐与右衛門知行所迄測る。(昼休木世満坊、一里二十二丁五十間六寸)。



(表紙題字は伊能忠敬の筆跡)

先手坂部、永井、今泉、箱田、佐助、大住郡簗毛村より初、小簗毛村、簗毛村字小林、田原村(小田原領、大久保加賀守内瀬戸喜三太出る)、字蔵ヶ谷字金山、字道切、字水上、田原村止宿迄測る。(簗毛村より一里二丁四十九間三尺)、止宿(名主儀右衛門、別宿百姓治郎左衛門)。

(渡辺)

目次

76号

表紙解説

国立国会図書館蔵大図 相州大山
(第九九号小田原の一部)

話題

●小宮山楓軒『懷宝日札』を読む

勘ヶ由、軽躁ノ人物ナリ

●伊能忠敬測量日記五の巻末の舞台

鉢崎からつながる歴史の断片

●『山島方位記』第三巻記載の富士山の高さ

●伊能忠敬 周辺の人③

●江戸幕府日記を読む

●忠敬談話室

●「修身」の教科書に書かれた伊能忠敬

●伊能忠敬没後二百年記念誌発行に向けて

●山武歳時記(八)歳神様を迎える

●石川県支部ニュース

●伊能忠敬出生の地 九十九里町で講演会開催

●ふるさと発見・歴史を語る会

●新入会員自己紹介

●会員だより

資料「伊能忠敬測量隊の足跡をたどる」連載第十二回

伊能忠敬銅像報告書「伊能忠敬の足跡」の改訂増補版

監修 渡辺 一郎 編著 井上 辰男

前田 幸子

山浦 佐智代

菱山 剛秀

前田 幸子

前田 幸子

前田 幸子

前田 幸子

前田 幸子

前田 幸子

前田 幸子

前田 幸子

前田 幸子

— 小宮山楓軒『懷宝日札』を読む — 勘ヶ由、軽躁ノ人物ナリ

前田幸子

はじめに

『懷宝日札』は水戸藩の漢学者で郡奉行でもあった小宮山楓軒が著した随筆風の書留である。この中に伊能忠敬に関する記述が何か所かあり、これまでもいろいろな論文の中で引用されてきた。しかしそれらの引用はいずれも断片的なものだったので、今回この書物の中から伊能忠敬に関係すると思われる記述をすべて抜き出し、内容別にまとめて紹介してみたい。著者の楓軒は忠敬と直接の交際はなかったらしく、知人である安食村の仙右衛門という人物や窪木蟠龍からの聞き書きとして書いている。仙右衛門は忠敬の親戚筋の人物であり、窪木蟠龍は周知のように忠敬の漢学の師であり親友でもあった久保木清淵である。情報元が明記されていない記事もあり、記述内容の当否は不明であるが、同時代の信頼おける人物が残した記録として大変興味深い。伊能忠敬の実像をさぐる上での貴重な手がかりになるものと思う。

(なお、原文の旧字体は新字体に改め、各文章の末尾に該当の冊番号を括弧書きで表示した。)

- ◇冊番号と著述時期
- ・第三冊 文化九年七月起筆 (著者四十九歳)
 - ・第七冊 文化十二年乙亥正月起筆(〃五十二歳)
 - ・第九冊 文化十四年丁丑五月起筆(〃五十四歳)
 - ・第十冊 文化十四年丁丑九月廿八日起筆(〃)
 - ・第十一冊 文政元年戊寅八月起筆(〃五十五歳)
 - ・第十二冊 文政二年六月起筆 (〃五十六歳)

伊能忠敬に関する記述

「勘ヶ由、軽躁ノ人物ナリ」

○勘ヶ由、初ハ浪人格ト云ニ出ツル。浪人格ト云ヘルモノ、天下ニ二人アリト云フ。後、小普請ニ入ル。禄ハ五十表、其他ハ役料ナリ。勘ヶ由、軽躁ノ人物ナリ。子孫或ハ弟子ヲ教ユルコト、尤モ嚴ナリ。人ニ応対スルニ、己レ言フベキコトノミヲ談ジテ、人ニ口開カセヌ人ナリ。勘ヶ由子三郎右衛門、先過テ死ス。勘ヶ由少モ屈セズ。三郎右衛門ハ不仕合ナリ。我ハ長寿ニテ仕合ナリト云ヘリ。孫三次郎、今年十四歳、蟠龍門人ニテ曆学文書ヲ善クス。勘ヶ由教ユルコト嚴ナリ。人其天年ヲ夭センコトヲ危ム、勘ヶ由曰、学バズシテ長生センヨリ、学ビテ短命ナルコトマサルベシ。見ニ教ユル、仮リニモ妄語偽言ヲ禁ズ。タトエバ、隣兒ト相殴ツ。汝何ヲスルカト問ヘバ、自首シテ隣兒ヲ毆タリト云ノルイナリ。仙右衛門見タル時、食膳ノ給事スルトキニ欠(アクビ)セリ。勘ヶ由旁ナル帚ノ柄ヲ以テ強ク打ツ、自後アクビスルコトナシ。勘ヶ由ノコト、人呼デ六刀先生ト云フ。其故ハ、伊能ノ家代々領主ヨリ免ジテ、雙刀ヲ帶シム。天明ノ飢ニ窮民ヲ救ヘル功ニヨリ、公義ニ苗字代々御免、帯刀一代御免ト命ゼラル。後勘ヶ由学アリト云ヲ以テ、帯刀ヲユルサル。コレニテ六刀ナリ。(第十一冊)

【大意】勘ヶ由は初めは浪人格という身分であったが、その後、小普請組に編入された。禄高は五十俵、その他は役料である。勘ヶ由は「軽躁の人物」である。子孫や弟子を教える際は非常に厳しく、また人と応対する際には、自分が言いたいこ

＊＊小宮山楓軒＊＊(二七六四—一八四〇)

水戸藩士、漢学者、農政家、民政家。名は昌秀、号は忍軒、致仕後に楓軒。明和元年(一七六四)生まれ。師是水戸藩の碩儒立原翠軒。二十歳で家督を継いで彰考館に入り『大日本史』の補修・校訂に従事、二十六歳で藩主の侍読となる。三十六歳のとき提言が認められて南郡の郡奉行に抜擢され、以後二十一年間紅葉村(鉾田市)に住み数々の勸農殖産政策を行って荒廃した村々の立て直しに顕著な実績をあげた。また小川稽医館(小美玉市)や延方学校(潮来市)を設置。延方学校には窪木蟠龍を招聘し、農閑期に巡回講話を催すなどの文教政策を実施した。五七歳で郡奉行から留守居物頭に転じて水戸に帰還。その際、離任を伝え聞いた村民が見送りに二里余の道を埋め、別れを惜しんで号泣したという。のち藩主斉昭公に登用され町奉行や側用人を勤めたが会沢正志斎・藤田東湖ら改革派と対立、天保九年致仕して同十一年(一八四〇)七十七歳で没した。生涯を通じて史書・地誌の編纂、文献の筆写に務め、編著書は千余巻に及ぶ。

＊＊『懷宝日札』十五卷十五冊＊＊

楓軒が郡奉行在任中の文化八年から留守居物頭となった翌年の文政四年(四十八歳から五十八歳)の間に随時書き留められたもので、国立国会図書館に自筆本が所蔵されている。他に伝本はない。本稿の原文は中央公論社『随筆百花苑』第三卷所収 朝倉治彦編 小宮山楓軒「懷宝日札」に拠った。

とだけ言つて、相手に口を開かせない人である。勘解由の息子の三郎右衛門（景敬）は親に先立つて早死した。しかし勘解由は少しも挫けず「三郎右衛門は短命で不幸せだ。私は長命で幸せだ」と言つた。孫の三次郎（忠誨）は今年十四歳、窪木蟠龍の門人で暦学文書がよく出来る。勘解由が厳しく教育するので人々は三次郎が早死にするのではないかと心配した。すると勘解由は「学ばないで長生きするより学んで短命なほうがいいのだ」と言つた。子供に教えるときにも、嘘や偽りを禁じ、厳格な態度で接した。仙右衛門が子どもだった時、給仕するときに欠伸をした。すると勘解由は傍にあった簞の柄で仙右衛門を強く叩いた。仙右衛門はそれ以後、欠伸することはなかった。

勘解由のことを人呼んで「六刀先生」という。その理由は、伊能家代々の帯刀御免、天明の飢饉の際の窮民救済の功による帯刀御免、さらに勘解由の学識による帯刀御免で、合計六刀である。

【備考】◇この文章は情報元が明記されていないが、仙右衛門の経験談が途中に出て来ることから、仙右衛門からの聞き書きであると思われる。

◇忠敬の第一次測量時の辞令書に記された肩書は、「高橋作左衛門弟子 西丸小姓組番頭津田山城守知行所 下総国香取郡佐原村元百姓浪人 伊能勘解由」であった。

◇「浪人は失業者、失職者のことで百姓でも町人でも構わない」（稲垣史生『江戸武家事典』）

◇【軽躁】「落ち着きがなく、かるがるしくさわぐこと。軽はずみなこと」（『広辞苑』）



小宮山楓軒肖像画
（茨城県立歴史館所蔵）

◇忠敬が「軽躁」であつたとすると、「終身、黙然なる事と、手を空敷する事と、人の怠慢なるを嫌ふ。人或は過て性急といふ」（渋川景佑述『伊能翁言行録』）、「伊能子ト申人ハ何事も『ざつと』したる急性にて、上下四方へ目の行届きかね候人にて御座候」（間重富書簡）という人物評と符合する。また身内や弟子に厳しいという評定は、長女稲を勘当し、二男秀藏を放逐した逸話とも合致する。

◇忠敬は「教育じじい」だった。「三治郎は元氣に手習、読書、算術に精を出している。しかし柔和貞順でないので、毎日夜、尾形が論語の講釈をしている。まだ分らないと思うが、尾形自身の好みでいつときの間、講釈している」『春秋左氏伝』十五巻を三治郎の素読に使うので、早船なり飛脚便なりで急送せよ。等々、熱心な教育ぶりが書簡にみえる。その後、忠敬は「三治郎は私の手には余る、難しい子だ」と、言うことを聞かない忠誨（当時十一歳）の教育にさじを投げたが、その三年後、十四歳になった忠誨に厳しい教育をしたようだ。結局、忠誨も弟の鍬之助も早逝した。

「勘ケ由、素ヨリ量地ノ学ヲ好ム」

○安食村仙右衛門曰、伊能勘ケ由ハ、上総小堤村ノ人、仙右衛門実ノ父ト再従弟ナリ。故ニ、仙右衛門モ幼年ノ時、勘解由ニ隨身セリ。勘解由、左原ノ伊能三郎右衛門ノ入婿トナリ、家産衰ヘタルヲ引起シ、年五十歳ノ時、子三郎右衛門ニ家ヲ譲リ、江戸ニ出ヅル。左原ノ地面代三百両ノ株アリ。子三郎右衛門ハ愚ニ近キモノナレド、家産ヲ譲リ、毫モ惜シマズトゾ。勘ケ由、素ヨリ量地ノ学ヲ好ム。江戸ニ出テ、深川ニ居ル時ニ、高橋作左衛門大坂ヨリ来リ、安部撰津守邸中ニ寓ス。即、コレヲ師トシテ天文ヲ学ブ。日々、星ヲ戴テ深川ヲ出テ、暮ニ及ンデ帰ル。其銳意如此。仙右衛門モ、此時日ニ召連ラレシト云フ。（第十一冊）

【大意】安食村の仙右衛門が言うには、伊能勘解由は上総小堤村の人で仙右衛門の実父と又従弟である。その関係で仙右衛門も幼い頃、勘解由の従者をしていた。勘解由は伊能家の入婿となつて衰えていた家を再興し、五十歳の時に息子の三郎右衛門（景敬）に家産を譲つて江戸に出た。佐原の地面代三百両の株があつた。息子の景敬は愚か者に近いが、忠敬はその息子に家産を譲つて少しも惜しまなかったそうだ。勘解由は元来、量地の学を好んだ。江戸に出て深川に住んでいる時に高橋作左衛門（至時）が大坂から来て安部撰津守邸に寄寓した。勘解由はすぐさま師事し、毎日、夜明け前に深川を出て、日が暮れてから帰宅するという熱心さで天文学を学んだ。仙右衛門はこの時期に従者をして

【備考】◇「子三郎右衛門ハ愚二近キモノ」この記述をめぐって故小島一仁氏は作家の井上ひさしと論争した。(会報第10号・第11号)

◇文化八年九月七日忠敬の景敬あて書状に、「景敬は性格が柔和なので、訴訟の場に出るのには不向きであるから出府するに及ばず、名代として妻りと又は三治郎に出府させるように」とある。不向きである理由は「訴訟人が不埒なる儀を申し出て、その応答に難渋するだらうから」という。景敬はこのとき四五歳。妻りてはしつかり者だったが、三治郎はわずか五歳だった。

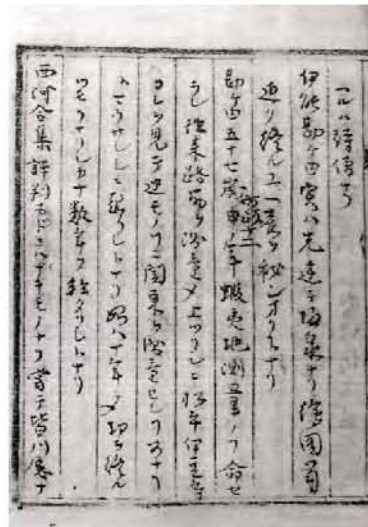
◇景敬は忠敬から引継いで村方後見役をつとめ、寛政十三年には村民の箱訴により忠敬とともに幕府の褒賞に与っている。「愚二近キ」とは、知力ではなく、性格について言ったものであろうか。

◇忠敬の入門前後についての記述である。高橋至時は寛政七年四月に出府後、十一月に天文方に任命されるまでの間、安部撰津守邸(千代田区永田町)内に寄寓しており、五月に江戸に出た忠敬が即刻これに師事したという。忠敬の入門の時期は寛政七年説と寛政八年説があるが、この文は寛政七年が正しいことを推測させる。

◇「勘ケ由、素ヨリ量地ノ学ヲ好ム……即コレヲ師トシテ天文ヲ学ブ」この文言は、忠敬の学問の本拠が量地学であり、天文学はその領域内であった、とも読める。忠敬は天文学を熱心に学び、天体観測の腕を磨いて「測天量地」を究めた。

◇「入門」とはいつても「至時は別に家塾を開かなかったたので、忠敬以外に門人はなかった」という。至時はこの時期、多忙を極めていて塾を開く余裕はなかった。したがって忠敬の入門当初の学習は、至時から与えられた天文暦学の書物を書写

し、それを独習し、疑問の箇所は文書等で質問する、という形だったと考えられる。忠敬は授時暦法を独学で習得していたので、入門と同時に『暦象巧成』上下編の講習を許されたといわれる。



『懷宝日札』自筆原本
(国立国会図書館蔵)

「勘ケ由死ス。高橋作左衛門ノ墓ニ双ベ葬ル」

○勘ケ由死ス。高橋作左衛門ノ墓ニ双ベ葬ル。寺僧曰、御目見以上ノ人ト以下ノ人ト双ブコト如何。今、作左衛門ノ曰、勘ケ由ノ高名、父ノ上ニ出ツ。且、予家ノ恩人ナリ。双ブルコト可ナリトテ葬ル。(第十一冊)

【大意】勘解由が死んだ。故高橋作左衛門(至時)の墓に並べて埋葬しようとする、寺(源空寺)の僧が「御目見以上の人と御目見以下の人と並べて葬るのは如何なものか」と言った。すると今作左衛門(景保)が、「勘解由の高名は父至時以上である。しかも勘解由は我が家の恩人である。並べてよい」といつて父の墓に並べて埋葬した。

【備考】身分違いの忠敬を至時と並葬することにお寺が難色を示したが、景保がこれを断行した。景保の忠敬に対する感謝と敬愛の情を示す逸話といわれる。伊能図の完成も、師の墓の側に葬って

もらいたいという忠敬の遺言も、その実現の陰には景保の剛腕ともいえる実行力があった。

「伊能勘ケ由、実ハ先達テ帰泉ナリ」

○伊能勘ケ由、実ハ先達テ帰泉ナリ。絵図御用近ク終ルユヘ、喪ヲ秘シオクトナリ。

勘ケ由五十七歳、寛政十二申ノ年、蝦夷地測量ノコト命ゼラレ、往来路筋ヲ測量シテ上ツリシニ、松平伊豆守コレヲ見テ、逆モノコトニ、関東ヲ測量センコト可ナリトマウサレシニ起リシトナリ。始ハ、十年ニシテ功ヲ終ルツモリナリシガ、十数年ヲ経タリシトナリ。(第十一冊)

【大意】伊能勘解由は実はこのあいだ死去した。地図作成事業が近く終わるので、それまで喪を秘しておくことである。

勘解由は五十七歳だった寛政十二年申年に蝦夷地測量を命じられた。街道筋を測量しながら進んで来ると、松平伊豆守がこれを見て、「いつそのこと、関東を測量したらよい」と言ったので全国測量が始まったそう。初めは十年で事業を終えるつもりだったが、十数年かかってしまったそう。

【備考】◇忠敬は延享二年(一七四五)生まれなので、寛政十二年(一八〇〇)には数え年でも五六歳だった。

◇松平伊豆守は当時の老中首座松平信明のこと。松平定信の改革方針を受け継ぎ、蝦夷地政策や北方問題に取り組んだ。堀田撰津守正敦の上司であり、測量事業を推進したトップである。

◇忠敬が蝦夷地西海岸を測るという第二次測量の計画書を幕府に提出した際、唐突に伊豆半島や相州が追加となった。なぜ突然に関東が追加されたのかが従来謎とされてきたが、その背景に松平信

明の意見があったとすると納得が行く。

◇松平定信も国防的見地から海岸線の重要性を認識していたようで、老中就任直後、秦櫛丸に江戸防衛の最前線たる伊豆・相模・房総の調査と地図作成を命じたらしく、寛政五年には櫛丸に案内させて自ら伊豆・相模の海岸を視察した。¹⁰

「勘ヶ由アリシトキハ、左倉ノ風俗甚美ナリシ」

○伊能三郎右衛門ハ、名主ノ上ニ立チテ、後見ト云コトヲ命ゼラル家ナリ。勘ヶ由アリシトキハ、左倉ノ風俗甚美ナリシト云フ。(第十一冊)

【大意】伊能三郎右衛門家は名主の上に立つて補佐する後見という役割を命じられた家柄である。伊能勘解由が在任していたときは、左倉の風俗が非常によろしかったという。

【備考】◇忠敬は十七歳で伊能家の入婿となり、若くして佐原村本宿の名主後見になった。その後、三六歳で佐原村本宿組の名主になり、三九歳で村方後見役となった。村民の推挙による名主後見とは異なり、村方後見は地頭が任命する公吏である。名主の上に立つてこれを監督する権限を付与されていた。忠敬は窮民救済や堤防工事等に尽力し、四七歳のとき領主から三人扶持を、五六歳のときに幕府から苗字帯刀を許された。佐原村は優れた指導者に恵まれて人心が安定した結果、風俗が甚美となったのであろう。領主津田氏は忠敬の引退をなかなか許そうとしなかった。

◇忠敬の有能な名主ぶりは幕府高官にも聞こえていた。第一次測量の交渉時に、御目付兼蝦夷地御用掛・羽太正義から、「年来の手腕と経験を活かし、測量するだけでなく蝦夷地に定住して蝦夷人の教化にあたってもらいたい」とまで言われている。なお「左倉」は「佐原」の意か。

「伊能村ハ下総ニアリ」

○伊能村ハ下総ニアリ。其先ヲ、伊能壹岐守ト云ヘルト云フ、其墓、蒔野村観福寺ニアリ。真言宗ナリ。妻ハ代々法華宗ノヨシ。(第十一冊)

【大意】伊能村は下総にある。先祖は伊能壹岐守という方だという。お墓は蒔野村の真言宗観福寺にある。伊能家の妻は代々法華宗のことだ。

【備考】佐原の観福寺には伊能壹岐守が天正十六年に建立した梵字碑がある。(会報第57号)伊能氏の出身地は源空寺の墓碑に「其先、出於大和高市郡西田郷」とある。ちなみに高橋至時の先祖の出身地も大和国郡山で、ほど近い所である。

周辺人物に関する記述

「作左衛門ハ、大坂玉造組ノ同心ナリ」

○作左衛門ハ、大坂玉造組ノ同心ナリ。御旗本ニ召出サレ、御目見以上ニナリ、其時ノ用意、槍大紋ナドノ如キ諸道具、皆勘ヶ由ヨリ弁シタリト云フ。惜哉、年四十許歳ニシテ死ス。(第十一冊)

【大意】作左衛門(高橋至時)は大坂定番玉造組の同心だった。旗本に召しだされ、御目見以上の身分となったが、將軍に拝謁する時に必要な槍や紋付の式服などの諸道具を揃える費用はぜんぶ勘解由が出したのだという。惜しいことに作左衛門は四十歳ばかりで死んでしまった。

【備考】◇『寛政重修諸家譜』によれば、高橋家は代々大坂京橋口定番同心を勤め、至時も井上筑後守組のとき父の跡を継いだとある。また、『天文方代々記』には寛政七年三月に永井信濃守から出

府を申し渡され、同年四月に安部撰津守から測量御用手伝を申し渡されたとある。井上、永井、安部とも京橋口担当であって、玉造組ではない。

◇忠敬が諸道具を弁じたことについて、広瀬秀雄は「富商の親友間重富を差し置いて忠敬に経済的援助を求めたかのような信じてほしい」¹¹と述べている。しかし、いかに富商であっても重富はあくまでも友人であり、弁じた費用は借金となる。その点、忠敬は門人であり、入門料や授業料として納めるので、返済の必要はない。他に門人がいなかった、ということから考えても、忠敬は至時に経済的支援をするのと引換えに、特別に入門を許されたのではないかと、さらに言えば、至時を大抜擢するにあたって堀田正敦らがパトロンとなる人物を捜し、桑原隆朝が忠敬を紹介したのではないかと、とも推測される逸話である。

「浅田幸隆ト云モノ」

○浅田幸隆(ママト云モノ、天文曆学ニ精キト云ヲ以テ、公義ヨリ召サル。辞シテ出ズ。其弟子高橋作左衛門ヲ薦ム。コ、ニ於テ、召出サル。(第十一冊)

【大意】浅田幸隆(麻田剛立)は天文曆学に精しいということと幕府から召出された。しかし辞退して出仕せず、弟子の高橋作左衛門(至時)を推薦したので作左衛門が召出された。

【備考】「寛政の改暦に際して幕府は麻田剛立を徴そうとする意があったが剛立は辞退し、高弟の高橋至時と間重富を推挙した」という文言が大谷亮吉『伊能忠敬』にみえており、麻田剛立の人となりを語る際の通説となっている。上原久¹²、保柳睦美¹³は、大谷が何に依拠したのかが不明だとしてこれを否定し、至時と重富は直接に幕府から呼

ばれたというのが正しいとしている。しかし楓軒のこの記述により、当時からこのような逸話が語られていたことがわかる。

「大坂十一屋ト云ヘル質屋」

○大坂十一屋ト云ヘル質屋、天文学二名アリ。五郎兵衛ト称ス。コレモ、幸隆ノ弟子ナリ。江戸ニ来リ居ル。算術ナドモ、ウトキ人ナリ。作左衛門ヨリ尋ルコト、四五日按ジテ答フレドモ、勘ケ由ノ即答ニ及バズト云フ。(第十一冊)

【大意】大坂の十一屋という質屋は天文学で有名で五郎兵衛という。これも幸隆(剛立)の弟子で江戸に来て住んでいる。算術などもあまりよく出来ない人である。作左衛門(至時)から質問されると四、五日考えてから答えるのだが、その答えは勘解由の即答に及ばないということだ。

【備考】十一屋は間重富(通称・五郎兵衛)のこと。重富は暦学研究のかたわら数学についても考究し、『算法弧矢索隠』その他の著書があるので、「ウトキ人」ではない。重富は高等数学は得意だが、算術は不得意だったという意味であろうか。忠敬の算術の優秀さが際立つ逸話である。

「今ノ作左衛門、天文学父ニ及バズトイヘドモ」

○今ノ作左衛門、天文学父ニ及バズトイヘドモ、御書物奉行兼職命ゼラル。先作左衛門ノ下役ニ、足達左内ト云ヘルモノアリ。天文学、今ノ作左衛門ノ上ニ出ズ。(第十一冊)

【大意】今の作左衛門(景保)は天文学は父に及ばないが、御書物奉行の兼職を命じられた。先作左衛門(至時)の下役に足達(足立)左内という者がいるが、天文学は今の作左衛門に及

ばない。

【備考】◇景保は三十歳のとき、突然御書物奉行に任ぜられ、天文方と兼職することとなった。御書物奉行は天文方より七十余段も格上だったので、自動的に他の天文方を越えて筆頭に昇進した。

◇足立信頭(通称・左内)(二七六九—一八四五)。

麻田剛立門下、至時、重富に次ぐ高弟。寛政の改暦および天保の改暦に従事し、四十一歳のとき景保の手附となる。四十五歳のとき蝦夷地に出張、ゴロヴニンがその学識を認めたという逸話がある。「只々器用にやり過ごそうという怠け心で頼りにならない」(間重富書簡)という面もあった。景保より十六歳年長。六十七歳で天文方となる。◇足立左内は、父至時に及ばなかった景保の上にも「出ヅ」ではなく「出ズ」と評されている。

地図・測量に関する記述

「水戸ノ長赤水坐ラニシテ」

○伊能勘解由、官命ヲ奉ジテ、日本地図ヲ製ス。人ニ話シテ曰ク、予諸州ヲ跋涉シテ製スルニ、甚ク難キコトヲ覚フ。水戸ノ長赤水坐ラニシテ、ヨク図ヲ製スルコト、甚ク慮ズルニ堪ヘタリ。(第三冊)

【大意】伊能勘解由は幕府の命令で日本地図を製作している。人に話して「私は諸州を歩き回って実測で地図を作っているが、非常に難しいと感じる。水戸の長久保赤水が居ながらにして地図を作れたことには、非常に感心する」と言った。

【備考】◇長久保赤水(一七一一—一八〇一)は常陸国高萩の人、水戸藩儒者。各種の地図や伝聞

情報を収集し、それらに基づいて日本図や世界図を製した。安永八年(一七七九)『改正日本輿地路程全図』を刊行。市販されて広く普及し、明治まで長期にわたり使われた。

◇忠敬も赤水図を所持しており、測量にも携行して随時参照している。

◇赤水は晩年郷里赤浜に帰り、享和元年(一八〇一)七月二十五日に八五歳で没した。忠敬はその数日後の八月三日に第二次測量で当地を通過した。『測量日記』に「赤浜村、長赤水の出し村なり」と記し、敬意を表している。

「讃州ハ測量セズ」

○讃州ヒケケ久米栄左衛門 天文地里ノ学ニ委シ伊能勘ケ由、此人ノ言ニヨリ、讃州ハ測量セズ。(第七冊)

【大意】讃岐国引田の久米栄左衛門は天文地理の学に詳しい。伊能勘解由はこの人の言葉により、讃岐国は測量しなかった。

【備考】久米栄左衛門通賢(一七八〇—一八四一)は間重富の門人、科学者。文化三年、高松藩から領内測量を命じられ、讃岐の地図を作成した。その二年後の文化五年、第六次測量の際に高松藩の案内役として伊能隊に付き回った。四国測量について大谷亮吉は、「四国地方の各藩が測量隊に多くの家臣を同行させ厚遇したのは、測量作業への警戒心と、測量隊監視のためだった」と述べている。また、中村士は「久米はその孤高な性格のため、あるいは藩の秘密防衛のため、自身が行った領内測量について忠敬に語らなかった」とみている。なお、『測量日記』の記述を読む限りでは、讃岐国も通常通り測量しているように見え、「測量セズ」とは読み取れない。

「二十七里何分何里ニアタル」

○度数ノ事、一度相距ルコト三十里トモ、二十
八里トモアリテ、定説ナシ。伊能勘解由推歩測
量シテ試ルニ、二十七里何分何里ニアタルト云。
西洋ノ説モ如此トゾ。(第十冊)

【大意】緯度については、緯度一度の距離が三
十里とも二十八里ともいわれていて、定説がな
かった。伊能勘解由が測って計算してみると、
緯度一度は二十七里何分何里とかにあたるこ
とわかった。西洋の説でも、このような値だとい
うことだ。

【備考】忠敬は第一次測量において歩測によつて、
緯度一度の長さ「二十七里余」の値を得た。第二次
測量では間縄や量程車を用いてより正確に測り、
「二八・二里」の値を得た。この値は至時が翻訳
した『ラランデ暦書』に記載されている数値とほ
ぼ一致した。

「鹿島浦ト南部ノ浜ニアリ」

○南北直径屈曲ナク、二十里モアルベキ地ハ、
鹿島浦ト南部ノ浜ニアリ。其他日本中ニハアル
コトナシ。是又勘ケ由説ナリト、蟠龍話ノヨシ。
(第十冊)

【大意】南北方向にまっすぐに二十里もあるう
場所は、鹿島浦と南部の浜で、そのほかには日
本中どこにもない。これもまた勘解由の説であ
ると、窪木蟠龍が話したそうだと。

【備考】窪木蟠龍の話の又聞きである。「南部の浜」
(三陸海岸)は險阻で陸路では測量できず、船で
引縄測量した場所もある。忠敬は「自東都仙台、
又至南部駅路平坦多シ」⁸²と言っている。「南部の
浜」は「南部の路」(奥州街道)の間違いか。

「薩摩ハ貧国ナリ」

○窪木蟠龍曰、薩摩ハ貧国ナリ。肥後ニ隣レド
モ、肥後領一段宜シ。水際ノタチタルガ如クニ
見ユルヨシ。伊能勘ケ由ノ話ナリ。(第九冊)

【大意】窪木蟠龍が言った。薩摩は貧しい国で
ある。肥後(熊本)に隣接しているが、肥後の
ほうが一段階豊かであることが、明瞭に見てと
れるそうだと。伊能勘解由の話である。

【備考】当時、薩摩は他国からの出入りが厳重で、
内情が分らなかったといわれる⁸³ので、これは得
難い情報だったろう。伊能隊は第七次と第八次測
量で薩摩に入った。隊員の尾形慶助は「薩摩入り
厳重、おおいに恐る」⁸⁴と妙薫に書き送った。⁸⁵

楓軒と蟠龍に関する記述(参考)

「蟠龍講礼楽記」

○五月八日延方講釈出席、蟠龍講礼楽記、茂作
講大学、聴衆四百三十七人ナリ。(第十冊)

【大意】(小宮山楓軒は)五月八日に延方学校(現
在の潮来市延方に創立した一般領民対象の学
校)で開催した講話会に出席した。蟠龍(久保
木清淵)が四書五経の『礼記』から「楽記篇」
の講義を、茂作(澤田平格)が同じく四書五経
の『大学』の講義をした。聴衆は四百三十七人
だった。

【備考】楓軒は久保木清淵を延方学校の教官とし
て招聘した。忠敬は水戸藩から要請をうけた清淵
に対し、書簡(久保木清淵に教授就任を勧める)⁸⁶
を送ってこれを励ました。

(了)

- 1 上原久『天文曆学諸家書簡集』148頁
- 2 千葉県『伊能忠敬書状 千葉縣資料』9-7
- 3 安藤・伊能『伊能忠敬未公開書簡集』B-18三
- 4 安藤・伊能『伊能忠敬未公開書簡集』B-1五
- 5 千葉県『伊能忠敬書状 千葉縣資料』17-1
- 6 佐久間達夫『測量日記 一』「蝦夷于役志啓行策略」
寛政十二年閏四月五日
- 7 佐久間達夫『測量日記』165頁 254頁「仏国曆象編斥妄」
- 8 上原久『高橋景保の研究』482頁
- 9 大谷亮吉『伊能忠敬』38頁
- 10 海野一隆『地図の文化史』170頁
- 11 佐久間達夫『測量日記 一』「蝦夷于役志啓行策略」
9頁 寛政十二年三月晦日
- 12 保柳睦美『伊能忠敬の科学的業績』141頁 広瀬秀雄
「伊能忠敬の全国測量と経度問題」
- 13 上原久『高橋景保の研究』139頁
- 14 保柳睦美『伊能忠敬の科学的業績』288頁
- 15 保柳睦美『伊能忠敬の科学的業績』296頁
- 16 会報第39号 安藤・伊能家文書紹介 四 足立左内書簡
「有坂隆道『享和期における麻田流天文学家の活動をめ
ぐつて』」178頁
- 17 『江戸日記』文化十一年九月四日
- 18 佐久間達夫『測量日記 三』120頁 文化七年五月七日
128頁 文化七年六月十八日
- 19 大谷亮吉『伊能忠敬』130頁
- 20 中村士『江戸の天文学者 星空を翔ける』138頁
- 21 佐久間達夫『測量日記 一』「第一次測量日記」39頁
- 22 渡辺一郎『伊能測量隊まかり通る』185頁
- 23 『世田谷伊能家伝存伊能忠敬関係文書』22頁
- 24 会報第41号 安藤・伊能家文書紹介 五 尾形書簡
- 25 安藤・伊能『伊能忠敬未公開書簡集』B-1六

伊能忠敬測量日記五の巻末の舞台

鉢崎からつながる歴史の断片

山浦 佐智代

① 鉢崎

新潟県柏崎市米山町。その昔、ここが越後国の「鉢崎(はっさき)」であった。北国街道の宿場町で、御金蔵もある関所の町でもあった。

享和二年十月二日(一八〇二年十月二十八日)伊能忠敬測量隊は第三次測量の道中で、柏崎を出発し、次の宿泊の地でもある鉢崎を目指して、測量を開始した。なお、この日の測量日記には「朝六つ半頃柏崎町出立、此日曇午後まで度々雨」と記されている。

なお、柏崎から西南西方向に四キロメートル程離れている鯨波から、鉢崎までの海沿いの地域は「米山三里」と呼ばれていた。ここは、米山(九九二、五メートル)の北麓側にあたり断崖が多く、登り降りの高低差が四十メートルもあるような険しい坂道が続く、北国街道最大の難所となっていた。

ところで、この鉢崎の関所は、上杉景勝(一五五〇〜一六二三年)の時代に出来たもので、上杉謙信(一五三〇〜一五七八)の跡目を争った「御館の乱」の舞台の一つ、旗持山の麓で山塊が海に迫っていて陣地となっていた所だ。徳川家康の時代になってからは、この関所は高田藩

に引き継がれ「入鉄砲に出女」に、特に注意が払われた。これは、鉄砲が関八州へ持ち込まれないようにする事と、江戸に住まわされている諸大名の妻子たちが、郷里に逃げ帰らないように見張ることである。また、この関所の他に、関川の関、市振の関の三か所は「頸城の三関」と呼ばれ、重要な役割を果たしていた。



上越市立高田図書館所蔵

『訂正越後頸城郡誌稿』 附図 鉢崎関所の図

② 鉢崎関所での出来事

さて、測量隊一行は日も暮れ始めた頃、米山三里も無事越え、鉢崎の関所にたどりついた。

しかし、彼らを待っていたのは、予期せぬ出来事であった。何が起きたのかは、渡辺一郎氏の著書『伊能忠敬の歩いた日本』(ちくま新書一九九九年)から抜粋し書かせていただく。

日本海沿岸を順調に測量し、越後・柏崎の近く、鉢崎という関所にさしかかった。高田藩預かりの関所だが、領主から通達が届いていなかった。十月二日、測量隊は測量しながら後から行くこととして、荷物を村役人に預けて先に関所を通そうとした。関所役人は他の荷物はよいが、長持ちは中を改めなければならぬという。関所のチェックは出女、入り鉄砲といわれるように、女や鉄砲を隠しやすい長持ちは原則として蓋を開いた。

忠敬が「おう、そうかそうか」といえば問題にならなかったが、「それは家中か百姓のことである。われわれの測量御用については、道中奉行・勘定奉行の先触れがあり、勘定奉行から領主にも通達されている。どこの関所でもそんなことをいわれたことはない。長持ちを改めるのは心得違いだ」と、こたわって交渉をさせる。話し合いの末、争っても時間がかかるので、鍵を差し込むだけにすることになる。鍵を合せて長持ちは無事に通る。

そのあと、関所の付近を測量し関所前を歩測で進んでくると、無刀で袴も付けない下役が出てきて、関所の区域を無断で測るのはケシカラシと文句をいう。忠敬は「測量は御料(幕府領)、私領ともおこなっており、聞かれれば答えるが

いちいち断らない。そんなこととしては仕事にならない」と突っぱねる。「測量に差し支えるから、聞くのなら宿にこい」といって作業を継続して宿に入った。だが、結局関所からは音沙汰はなかった。

長野から小諸、上田、碓氷峠^{うすい}の旧道を経て享和二年十月二十三日、江戸帰着。

以上 抜粋

忠敬は、よほど悔しい思いをしたのである。う、測量日記五の巻末に「越後国鉢崎御関所の事」として詳細に綴ったのだった。



鉢崎関所跡（この坂は、聖ヶ鼻展望広場に続く）

③ 鉢崎関所の務め方日記

実は、鉢崎の関所役人・竹村市之丞が嘉永六年（一八五三年）に記した勤め方日記が、平成の時代になってから見つかっている。ご覧いただきたい。

（米山地区コミュニティ振興協議会提供）

◆六月二十三日

一、今朝長谷川甚三郎から、「只今から女が通

関のために参ります」と届出があったので、我等竹村市之丞と伊藤友八の兩人は羽織を着用し、又友八は御印鑑箱を持参して番所に出席した。御足輕の当番二人が見張りをしていた。それから、問屋安右衛門から御直御証文が番所へ差し出されたので、御足輕当番の一人がこれを受取り、我等は直ちに御証文を確認した。御直御証文の内容は、次の通りであった。

女四人内、女髪切一人、少女一人、乗り物三挺の一行は、伊勢国桑名より越後刈羽柏崎迄の旅行である。

鉢崎御関所は間違ひなく通関させてやりなさい。この人達は松平越中守殿家来の山脇十左衛門といわれる方の 母と妻と娘達であることが、事前に越中守殿から通知され判明しているものである。

（以上勤め方日記より抜粋）

④ 御金荷と御金蔵

御金蔵は何故、鉢崎にあったのか・・・その話は慶長六年（一六〇一年）にさかのぼる。

関ヶ原の戦いの後、佐渡ヶ島は徳川家康の支配下に置かれた。その佐渡ヶ島の相川で、金と銀の鉱脈が新たに発見され採掘が始まった。採れた金銀は「御金荷」と呼ばれ、江戸城へと運ばれることになった。御金荷は木箱に納められ、馬の背に載せると、宰領役人が付き添い相川を出発し、陸路で小木港^{おぎこう}まで運ばれた。ここで日和待ちして、海路で出雲崎港まで行き陸揚げさ

れた。ここからは、陸路で北国街道を進むのだが、出発準備の為に、二日間ほど要したという。その間、御金荷は「御金蔵」と呼ばれる蔵に保管し、自身番や火防組により厳重に守られた。準備が整うと御金荷は出雲崎を出発し、途中の柏崎で継立^{つぎだて}（人馬を替えること）をして鉢崎に向かった。この鉢崎で第一日目の泊まりとなり、御金蔵も置かれたのだった。翌日、継立てて出発する。このあと潟町宿、春日新田宿などでも継立て高田宿へと行き、ここが二日目の泊まりとなった。このように、継立や泊まりを繰り返しながら北国街道を進み、信濃国の追分宿から中山道に入り、十一日目には江戸城に到着した。ちなみに、出雲崎での第三次測量隊の止宿先は、良寛^{りょうかん}（曹洞宗僧侶・書家・歌人）の生家で庄屋の橋屋であった。このとき、この屋敷内に御金蔵があった。しかし、翌年の第四次測量隊の出雲崎での止宿先は「京屋」に変わった。これは、「橋屋」が没落し「京屋」が頭角を現し、本陣になったことを示している。このとき、御金蔵も橋屋から出されていた。移動先は、現在、道の駅「越後出雲崎天領の里」付近とのことだ。

さて、御金荷は何故？相川に近い港から積み出されなかったか・・・。実は、当時の佐渡では、港ごとに最適な役目を持たせる整備がされていた。漁業用の港、資材運搬用の港、等々。この当時、御金荷の積出港に最適とされ、整備されたのが小木港であったのだ。その後、小木

港は西廻り航路の寄港地にもなった。

それから、継立は先触れなどにより各開所、各宿場に通知される。しかし、実際には先触れに書かれた以上に負担が、かかった。そして、この費用は、幕府から手当てしてもらえなかったという。そのために、関係する宿場や村々の負担は、重圧となつて行き、宿駅制度崩壊へとつながっていったのだ。さて、御金荷の輸送一回に必要な馬の数は、四十〜七十疋であった。しかし、各宿場で用意できるのは、人足二十五人馬二十五疋であった。(出雲崎宿と、春日新田宿は例外)その為、継立には近隣の宿場からも、応援してもらったという(助郷制度)。

⑤北国街道と北陸道

御金荷が通った「北国街道」は、上杉謙信と景勝が前代からできていた道筋を、戦いに備えて整備したもので、当初は中山道の追分から高田までであった。つまり、高田から出雲崎までは「北国街道」では、なかった。この区間は五畿七道のひとつの北陸道が通っていた。(現代の地名で説明すると)福井県から石川県、富山県を通り新潟県の沼垂(ぬつたけ)山形県の鼠ヶ関までの説も有る)までの日本海沿岸地域を結ぶ街道であった。しかし、御金荷が出雲崎で陸揚げされ高田を通り、江戸へと運ばれて行くうちに、ついには、出雲崎から高田までも、「北国街道」と呼ばれるようになった。つまり、出雲崎と高田の間は、北陸道と北国街道が重なっていると

言える。そして、「北国街道」と呼ばれる街道は他にもあった。つまり、古代に生まれた街道は、同じ名前前の街道があるなど、始点も終点も、変化したのが特徴である。五街道などの整備、一里塚などの設置などは、徳川幕府になってからである。また、御金荷を江戸まで無事に輸送する為に、三国街道(中山道高崎寺泊)と会津街道(新発田会津若松)を整備した。この二つの街道と北国街道は「佐渡三街道」と呼ばれ、参勤交代も通る重要な街道となっていた。そして、佐渡奉行が二人制になると、三国街道を使い佐渡へ赴任し、江戸へ帰るときには北国街道が利用された。

この当時、佐渡では鶴子銀山・新穂銀山などが開発されていたが、相川の金銀の産出量はズバ抜けていた。結果的には、日本で一番の産出量を誇る金銀山となったのだ。そして、江戸幕府の重要な財源になった。しかし、この山は徐々に産出量が減り始め、平成元年(一九八九年)には操業を停止した。今では「史跡佐渡金山」という観光施設となり、江戸時代の金銀山の採掘の様子を、再現して見せている。

⑥測量隊の宿泊先

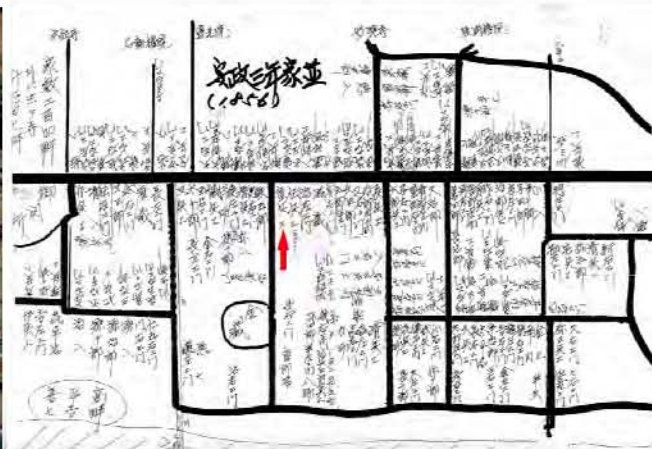
十月二日の測量日記から測量隊は鉢崎宿の「十兵衛」という家に泊まったことが分かる。この十兵衛という宿は、何処にあるのか、...この答えは、鉢崎の本陣であった近藤家の御子孫が、史料を調べて教えてくださった。以下に紹介する。

◆この家並みの図には「十兵衛」という名前が載っていない。しかし、同じ語音の「重兵衛」の家が、一軒だけあった。この「重兵衛」の家は昔、鉢崎で「宿」を営んでいた数軒の内の一軒であることが判明した。

◆忠敬が、宿の名前を聞き書きする時「重兵衛」の「じゅう」を急いで書き



現在も残る江戸時代の地割
(空中写真に安政三年町並み図の道路を加筆)



家並み図(↑の先に「重兵衛」の名が見える)

留める為に、「重」を、簡単な「十」という文字で記した可能性がある。

◆重兵衛の家は、関所のそばである。

以上のことから、測量日記に記されている宿泊先の「十兵衛」は、「重兵衛」の家であろうと推測できた。そこで、今も残る道筋をたどったが、残念ながら重兵衛の家は無く、空き地となっていた。

実は、ここ鉢崎では大正九年に大火があり、かなりの史料が消失してしまったという。しかし、近藤家には蔵があったため、そこに収まっていた史料は助かり、鉢崎の歴史をこのように示してくれたのだ。

⑦明治以降の鉢崎

明治二十二年（一八八九年）町村制実施にあたり鉢崎村は、清水村、大平村、小菅村と合併し中頸城郡鉢崎村が誕生する。鉢崎の住所は中頸城郡鉢崎村大字鉢崎となった。そして、十二年後の明治三十四年十一月一日、鉢崎村は、中頸城郡米山村と合併するのだが、鉢崎村の名が消え米山村が残り、鉢崎の住所は、中頸城郡米山村大字鉢崎となる。その後、昭和三十一年十二月十九日、米山村は柏崎市に編入合併され、柏崎市となり、鉢崎の住所は柏崎市鉢崎となった。ここで『米山』の名が消えてしまったのだ。

朝な夕なに仰ぎ見ている米山の名を、消したくないという熱い声が、地元住民の間から上がり、翌年の昭和三十三年四月に、鉢崎は米山町と改称したのだった。それに伴い、四年後には

信越本線鉢崎駅も米山駅と改称された。だが、鉢崎の名前も大切に残したいという気持ちもあり、神社と橋（現在はない）に鉢崎の名を残したという。また、その後に、完成した北陸自動車道のトンネルにも鉢崎の名前が付けられた。他に、郵便局に鉢崎の名が残されている。ところで、江戸初期の頃まで、鉢崎は『八崎』と書かれていたという。これは、聖ヶ鼻の岬から始めて



米山町と米山海岸

米山三里の間には、岬頭が八つあることから八崎と呼ばれていたからだ。では、どうして鉢崎となったか？それは米山の伝説に登場する飛鉢の法に由来してくるのだが、この話は次回に紹介したい。

なお、難所で名高い米山三里は『天空の橋』とも賞賛される米山大橋や、笠島トンネル、芭蕉ヶ丘トンネル、上輪大橋、胞姫橋、そして米山トンネル等が次々と完成し、難所は縮小してきた。さらに、新潟と関西圏を結ぶ、国道八号

線が通り抜けるなど、大きな変貌を見せている。

⑧松田伝十郎

しかし、このような土地の形状は、災害が起こりやすくもある。平成十九年（二〇〇七年）に発生した中越沖地震の際、この一帯も大規模な崖崩れや土砂崩れが起きてしまった。ここ米山町の聖ヶ鼻の展望広場にあった大きな石碑も、海に落下してしまった。さて、この石碑のことを御存じであろうか？

「カラフトは離島なり 大日本國々境と見きわめたり 松田伝十郎」

と刻まれていることを・・・。「間宮海峡」と呼ばれている海峡は、間宮林蔵が最初に発見したのではなく、実は、幕吏・松田伝十郎なのである。ここ鉢崎は、松田伝十郎の生まれ故郷なのだ。シーボルトにより、一八三二年に公にされた「日本辺海略図」には、タタール海峡の最狭部は Str. Mania seto 1808（間宮の瀬戸）と記されている。この1808は、伝十郎が「樺太は島である」と見極めた年である。林蔵が清国領の大陸にまで渡り、実測調査により地図を作成したのは、翌年（一八〇九年）なのである。

伝十郎と林蔵が、樺太へ派遣されたのは文化五年（一八〇八年）で、幕府の第四回目の樺太探検調査事業であった。この調査の詳しい様子は、次回に書かせていただくことにして、今、書きたいことは、伝十郎が「国境を見極めたこと」は、樺太からソウヤに戻った時、現地に詰めている松前奉行河尻春元に書面と口頭で報告していた。更に松前に戻って奉行の村垣定行にも

報告。この後、津軽三厩経由で江戸に帰った伝十郎には、白銀五枚、特別の辛苦に対して別に金十両が下賜されたのだった。つまり、この調査結果は、幕閣から認められているのだ。



松田伝十郎の石碑

一方、林蔵は翌年行った実測調査の報告書を、二回にわたって江戸の幕府天文方高橋景保に直接送っている。このことが、後に「間宮海峡」となった原因であろうという意見もある。
なお、落下した石碑は、地元の人々や多くの方々の熱意が実り、海から引き上げられ平成二十二年（二〇一〇年）三月、再び展望広場に設置された。

つづく

◎参考文献

- 『幕吏松田伝十郎のカラフト探検』 中島欣也著 新潮社
『伊能忠敬の歩いた日本』 渡辺一郎著 ちくま新書
『新潟県史』 資料編9 近世4 佐渡編

◎ご協力（敬称略）

- 佐渡市 本間滯子
柏崎市米山町 茂田井信彦
伊能忠敬研究会 菱山剛秀
柏崎市役所
柏崎市米山町コミュニティセンター
資料提供（敬称略） 近藤千鶴子
米山町
国土地理院
柏崎市立博物館
上越市立高田図書館



伊能図に描かれた「鉢崎」

アメリカ議会図書館蔵 伊能大図第76号（長岡・柏崎）部分



現在の鉢崎（柏崎市米山町）

国土地理院 「地理院地図」

『山島方位記』第三巻記載の富士山の高さ

菱山 剛秀

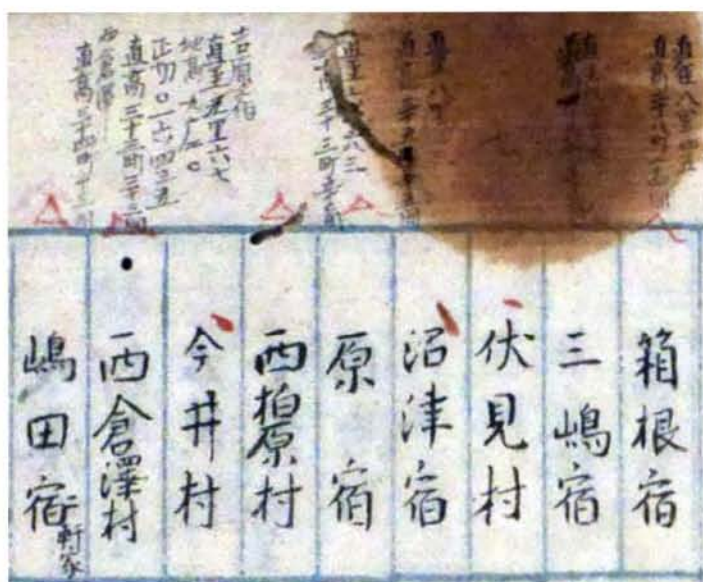
はじめに

伊能忠敬が測量した富士山の高さについては、本誌74号で報告した際、本誌47号の佐久間達夫氏の報告²を引用したが、佐久間氏の『山島方位記』に記載されているという6地点からの高さの報告のうち、沼津宿と原宿については高さの記載が無いことに気付き、資料をご提供いただいた戸村茂昭氏に、元データの確認をお願いした。

しかし、膨大な『三島方位記』³の記録の中から佐久間氏が拾い出した富士山の高さの記述を探すのは容易ではないと連絡をいただき、一旦は諦めかけていたところ、74号編集終了直前に戸村氏から資料を発見したと左図に示す1ページ分の画像を送っていただいた。

このページには、観測地点からの富士山の方位とともに、上の欄外に富士山の高さを計算した値が記録されている。

佐久間氏が本誌47号で報告した箇所に間違いがないと喜び、早速、沼津宿と原宿からの高さについて確認しようとしたのだが、その箇所は長年の保管の間に染みや虫食いで文字がほとんど読めない状態になっていた。戸村氏にお願いして、より解像度の高い画像を送っていただき、あれこれと画像を処理してみたが、結局判読することはできなかった。



記載文字の整理

しばらく時間が過ぎ、判読は諦めかけていたが、佐久間氏の報告にあった6か所の測量地点については、表の下端に各地点からの方位とともに、高度の値が記録されているのに気付いた。

そこで、これらの記載された読み取り可能な数値の関係から読みとり不能な箇所の値を推測することができるとは思いません、用紙の上部欄外は、左のように判読できた。



- (箱根宿) 直徑八里四五
直高二十八町二十四間
- (三嶋宿) 直至八里七五
直高十五町五十
- (沼津宿) 直至八里 直高三十五 五十五間
(この箇所は他の地点の表記の構成から「間」と推測可能)
- (原宿) 直至 八三
直高三十三町五十間
(この箇所は他の地点の表記の構成から「直」と推測可能)
- 吉原宿 直至五里六七
地高九度二〇
正切〇一六四三五
直高三十三町三十三間
- 西倉澤 直高三十四町十三間

※■は判読不能箇所

表の下段には、左図に示す高度角と三角関数の正切（正接：tan）の値が記載されている。

観測地点名

高度角と三角関数（正切）



箱根宿	高五度二〇	正切〇〇九三三五
三嶋宿	高六度四〇	正切〇一六八八
伏見村	高七度〇四	正切〇一二四二六
沼津宿	高七度五〇	正切〇一三■五■
原宿	高七度五〇	正切〇一三■五■
西柏原村		
今井村		
西倉澤村	高六度五分	正切〇〇一六五八 直至八里九二
嶋田宿二軒家		

以上の値を整理すると次の表のようになる。

観測地点	高度角	距離	正切 (tan)	高さ(距離×正接)	表の記載から推察可能
箱根宿	五度二〇	八里四五	〇〇九三三五	二十八町二十四間	
三嶋宿	六度四〇	八里七五	〇一六八八	■十五町五十■間	高さ(■十五町五十■間)
沼津宿	七度〇四	八里■	〇一二四二六	三十五町五十五間	
原宿	七度五〇	■八里三	〇一三■五■	三十三町五十〇間	正接(〇一三七五八)
吉原宿	九度二〇	五里六七	〇一六四三五	三十三町三十三間	
西倉澤村	六度五分	八里九二	〇一〇六五八	三十四町 十三間	

読み取り結果

判読不能な高さの記述箇所のうち、三嶋宿の最後、沼津宿、原宿の■は、他地域の文字の並びから、それぞれ「間」、「町」、「直」であることが推測でき、原宿の正切も対応する高度角が「七度五〇」と分かっているから、正切は三角関数表から〇一三七五八と引くことができ、■の箇所は、「七」と「八」であることが分かる。この結果、残ったのは■の3箇所（三嶋宿の高さ、沼津宿と原宿の距離）であり、いずれも西倉澤等の計算式（高さ〓距離×正切）を基に、各地点の読みとった値を使用して計算できる。

○三嶋宿の観測による富士山の高さは、前述の計算式により左のように求められる。

■富士山の高さ〓八里七五×〇一六八八

〓三十五町五十一間

○沼津宿、原宿から富士山までの距離は、高さの値を正接の値で除すること求められる。

■沼津宿と富士山の距離〓三十五町五十五間・

〇一二四二六〓八里〇三

■原宿と富士山の距離〓三十三町五十二間・

〇一三七五八〓六里八三

なお、この表で沼津宿の高度角七度〇四に対する正接の値〇一二四二六は、角度と整合していないが、直高の計算にはこの正接の値が用いられている。この値は、七度〇五に対応するので、八線表の隣接する値を読み違えた可能性がある。七度〇四の正しい正接の値〇一二三九七を用いた場合の直高の値は、三十五町五十間となる。

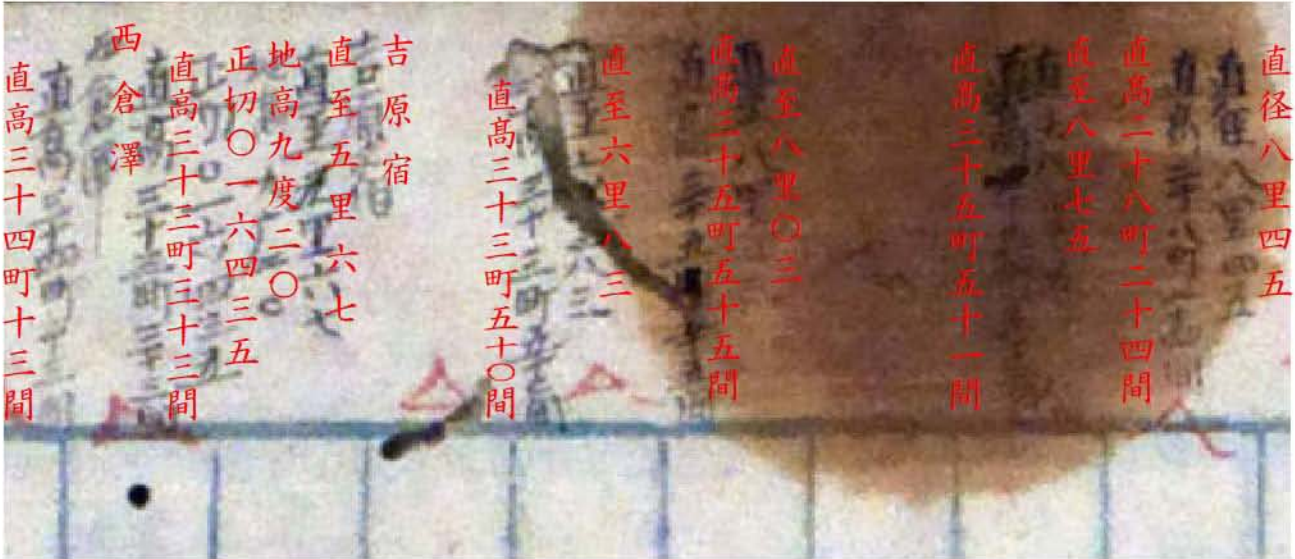
また、本資料では観測地点から富士山までの距離（直径又は直至）が掲載されているが、どのように算出したかは不明である。

以下に、記載内容確認のための計算結果と表の上部欄外に記載された文字の読み取り結果を示す。

記述内容確認のための計算結果

観測地	富士山までの 距離A	高度角B (単位:度)	正切C (正接:tan)	高さD (A里×C)	高さE (D×36町)	高さ (町、間)	高さ (m)	記述 一致
箱根宿	8.45里	5.33度	0.093354	0.789里	28.40町	28町 24間	3,098m	○
三嶋宿	8.52里	6.67度	0.116883	0.996里	35.85町	35町 51間	3,911m	○
沼津宿	8.03里	7.07度	0.123966	0.995里	35.84町	35町 50間	3,909m	×
			0.124261	0.998里	35.92町	35町 55間	3,919m	○
原宿	6.83里	7.83度	0.137576	0.940里	33.83町	33町 50間	3,690m	○
吉原宿	5.67里	9.33度	0.164354	0.932里	33.55町	33町 33間	3,660m	○
西倉沢	8.92里	6.08度	0.106575	0.951里	34.22町	34町 13間	3,733m	○

欄外の記述（赤字が判読結果）



おわりに

本誌74号において、本誌47号の佐久間達夫氏の報告にある三嶋宿における高さの値、二十三町五十二間は誤りの可能性があることを指摘したが、その原因は元の資料が読みとり不能であったことによるものと考えられる。即ち、佐久間氏は、微かに見える文字の形から「三十五町」を「二十三町」、「五十一間」を「五十二間」と読み誤ったものと思われる。

また、報告の最後に（注2）として、「既存の紹介における伊能忠敬による富士山の高さの値は、山島方位記の記録ではない」としたが、本資料の三嶋宿と沼津宿における高さの値は既存の報告に近く、現時点で本資料を完全に排除することはできなかった。

しかし、本資料の記載内容を見ると、記載の訂正が見られることや、前述の表の読み違い箇所が存在するなど、最終成果としては疑問が残る。本資料を提供いただいた戸村氏も「本書（三巻）の表紙には他巻にはない『下書』の記載がある」と指摘しており、本資料の性格については今後慎重な調査が必要と思われる。

注

¹ 菱山剛秀 2016 本誌74号『伊能忠敬の富士山の高さ測量』: 9-14

² 佐久間達夫 2007 本誌47号『富士山の方位測定』: 14-20

³ 『山島方位記』伊能忠敬記念館蔵

伊能忠敬 周辺の人③

渋川助左衛門景佑 前田幸子

はじめに

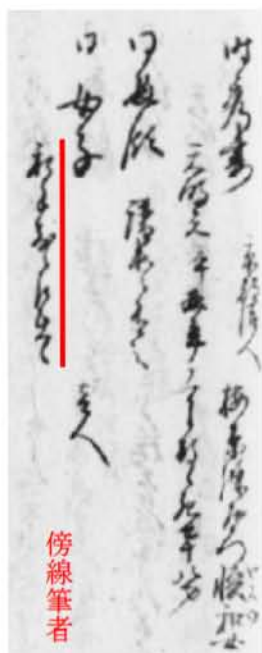


前回「高橋作左衛門景保」(第70号)で紹介した『新訂万国全図』を閲覧しに国立公文書館に向いた折、不思議なことがあった。閲覧請求のため蔵書端末で検索していると『江戸幕府日記』という書名が目についたので、興味を惹かれて一冊請求してみた。景保の見事な『新訂万国全図』を閲覧したあと、感動の余韻が冷めないまま席に戻り、うわの空で机上の『江戸幕府日記』を開いた。すると、くねくねしたくずし字の中から見覚えのある字句が目飛び込んできたのである。「天文方 渋川助左衛門!!」古文書を読み慣れない私にもはつきりとわかる文字列であった。驚いてよく見ると、隣の行には「伊能勘解由」、さらに前頁には「御書物奉行天文方兼帯 高橋作左衛門」の文字が読み取れた。何という偶然か。五〇〇冊もある『江戸幕府日記』のうちの一冊をあてずっぽうに請求し、たまたま開いた頁が文政四年九月十六日に景保や景佑が幕府から伊能図上呈の褒美を賜った時の記事だったのである。私は景佑に袖を引かれた気がした。「兄上の地図にばかり感心していないで私の事績も見て下さい」と。思えば万事に派手な兄・景保の陰に隠れて地味ではあるが、景佑もまた常に忠敬の近くにおいて伊能図の完成に寄与した人なのだった。この人を忘れてはならない。そのようなわけで今回は渋川助左衛門景佑すなわち高橋至時の次男・高橋景佑に焦点をあててみたいと思う。(別稿『江戸幕府日記』参照)

母親代わり

(※年齢は数え年)

高橋景佑(善助)は天明七年(一七八七)十月十五日高橋至時の次男として大坂に生まれた。兄景保とは二歳違いで、下に三人の妹がいた。家庭の事情等は第70号「高橋景保」で述べたとおりである。しかしその後、高橋家の「先祖書」を調べていて、もう一大家族がいたことが判明した。「先祖書」は幕府が『寛政重修諸家譜』を編纂した際に至時が提出したものであるが、その四代目時秀(至時の祖父)の項に「女子 老入」とあり、景佑ら子ども達と同じく「私手前二罷在候」、すなわち「私の所に居ります」と添え書きがしてある。至時がこの先祖書を提出した寛政十一年現在、浅草司天台の役宅に至時のおばにあたる女性が同居していたということである。「先祖書」から推測するに、この女性は至時の母・青木氏(24)が死去したとき、まだ未婚で家に居たので、家族の世話をするため実家に残ったと思われる。高橋家は当時、老人三人と病人、幼児二人を抱えた大所帯だった。六歳だった長男至時に志勉が嫁いで来るまでの十数年間、主婦として家政を担当し、志勉が寛政七年に急逝したあとは、母親代りとして子供たちの世話をしていたとみられる。至時の出府後、五人の子供たちはこの大お婆の監護の下、大坂の家で二年間過ごし、寛政九年十二月に一家で出府した。



傍線筆者

英才教育

出府した後は兄景保とともに浅草司天台の役宅から昌平坂学問所に通った。当時、景保と景佑が使った帳面が残っている。葉書大の和紙を綴じて「論語孟子覚帳」と題し、『論語』『孟子』から難読箇所を抜き書きした暗記帳である。兄弟で使い回していたのか、表面に「高橋作助・善助」とある。裏面には「浅草天文屋鋪 高橋作左衛門伴 高橋作助」とあり、字形がまだ幼いのと不釣り合いに難解な漢字が書いてある。景保は素読吟味で賞を受けたが、やはり並々ならぬ勉強が必要だったようだ。このほか学問所の授業日程や服装メモも書いてあり、兄弟の学校生活を彷彿させる。

兄弟は学問所で学ぶ傍ら、父から直接天文学を学んだ。享和三年(一八〇三)に至時(40)が間重富に宛てた手紙には、景佑(17)と景保(19)がすでに父の名代として天測を任されるほどの技量に達していたことが記されている。

〔前略〕幸いせがれは測量がすきなようで、子午線の測も大差ない程に測れるようになりましたので、名代として測らせております。せがれ兩人、下役等を相手にして、夜半まで退衝を測っております。……(星学手簡五十四)(会報第31号)

この兄弟は漢学の素養の上に天文学、さらにオランダ語も学んでいた。オランダ語の師は、周辺の人脈からみて、おそらくこの道の第一人者大槻玄沢ではないか。兄弟は当時として最高の英才教育を受けていた。大抜擢された高橋至時の子として兄弟は注目され期待されていた。至時のラランデ翻訳、伊能蝦夷地測量の決行も周囲からの重圧と無関係ではなかっただろう。至時は病没し、遺囑によりその後は間重富が指導にあたった。

第五次測量への参加

至時の死去から一年後の文化二年（一八〇五）、景佑（19）は伊能忠敬の第五次測量に参加した。景佑は内弟子でも幕吏でもないため、「天文方高橋作左衛門弟 高橋善助」の肩書での参加だった。客分的立場ではあったが、下役よりやや上の待遇で、忠敬に次ぐ副隊長格であった。天文方の下役たちとは相知った仲であり、若く体力もあつて夜の天測も一人前にこなせる貴重な人材であった。大谷亮吉は『伊能忠敬』で、景佑は「文化二年より同三年に亘り伊能忠敬に附随して東海街道及紀伊半島、中國沿海等の實測に従事し觀測術を練習すると共に各地の風俗民情を察して大に見聞を博むる所あり」としている。下役や内弟子たちと海岸線を辿った一年九か月に及ぶこの測量行が景佑の視野を広げ、人間的成長に大きく寄与したことは疑いない。この旅行から帰着した直後に景佑は結婚し、その後は渋川家に養子に入るので、この測量行は独身時代最後の貴重な機会であった。

大坂での墓参

景佑は、この旅行の帰途、文化三年十月に墓参のために測量隊と別れて大坂へ行き、十五日間の予定で滞在した。景保『高橋御用日記』八月九日に「善助儀草津方大坂表江罷越度之趣をも相談ス。委細御用留江記ス。」とあり、大坂行きは景佑の希望であったことが窺える。しかし、なぜ墓参に十五日もの日数が必要だったのか。それが従来謎とされてきた。このことについて、筆者は周辺の資料から以下のように推測してみた。

まず一つは先祖の墓の開眼供養をしたのではないかということである。その理由は、享和元年六

月、間重富が至時にあてて出した書状に、

「御先祖御石碑御再建之段、自足立（※左内）承り候、扱も目出度御義ニ奉存候、誠に御先祖御歎此之上なく、御升進之上にて珍敷事恐慮奉存候」とあり、至時が出府後に先祖の墓を再建したことが書かれているからである。至時は大昇進を果たしたのち、先祖代々の墓を建てなおした。しかし、開眼供養もしないまま過ぎていた。景佑はこの新墓のための法要を思い立ち、また、母志勉の十三回忌が近いので、それも兼ねて法事を執り行つたのではないかと考えるのである。

二つめは、至時の墓建立のための手続をしたのではないかということである。至時は文化元年に死去したが、文化三年のこの時点では、おそらく墓（埋葬）はまだなかった。なぜなら忠敬の日記に源空寺高橋墓所が登場するのは文化五年一月二日が最初だからである。その日は浅草司天台に年始に行き、その足で源空寺に参詣している。前年の文化四年も一月三日に浅草司天台に年始に行っているが、お墓には行っていない。もし至時の墓があつたとしたら忠敬は必ずお参りをするはずなので、その時にはまだ墓はなかった（遺骨は景保宅にあつた）と推測するのである。源空寺に墓を建てる際には無量寺の「寺送状」が必要である。

この墓参で、その手続きを行つたのではないだろうか。以上が墓参の謎に対する筆者の推論である。景佑は、大坂で祖母の実家・青木常左衛門家に身をよせた。高橋家は親戚が少なかつたこともあり、万事青木家を頼りにしていた。至時は書簡で「私伯父青木常左衛門と申者、是か壱人万端引請にて、相遣わし置候」と述べている。常左衛門は篤実な人柄で、何くれとなく高橋家の世話をした。



「夜中測量之図」 宮尾幾夫氏寄託 入船山記念館蔵
第五次測量における呉地方での天測風景を描いた「夜中測量之図」が呉市入船山記念館に収蔵されている。「右の絨毯に座しているのが忠敬、帯刀して象限儀の傍にいる武士の内、右の若者が、当時二〇歳の渋川景佑、左の観測を行っているのが坂部貞兵衛と推定される。」説明文は『世田谷伊能家伝存伊能忠敬関係文書目録』「35 渋川景佑」より抜粋



大阪市天王寺区にある無量寺の集合墓
高橋家の墓があるとしたらこの中である

なお、この測量行では下男が帰郷している。この測量に同行した景佑の下男吉平は大坂の青木家が世話した者だったが、「梅毒が悪化して用務を遂行できなくなった」として、景保が江戸で手配した宗兵衛という者を送り岡山で交代させた。『測量日記』文化三年正月九日の項に「朝晴 此夜厩局より書状を添、善助小者宗兵衛来着」とある。到着した宗兵衛は以後善助に随い、吉平は別隊でしばらく働き続けるが、帰路十月二十一日に善助が大津から大坂に立出ると「吉平病氣」となり、その後は測量日記に現れない。測量行を利用して公費で吉平を帰郷させたのではないだろうか。景佑は大坂で十五日間の滞在日程が「風邪をひいて」さらに三日間延びたが、十一月二十七日八ツ時、江戸に帰着した。翌二十八日、景保は堀田摂津守あてに「私弟高橋善助儀（中略）昨廿七日帰府仕候。」と届書を提出、忠敬の日記にも「十一月二十七日 此日善助帰府」とある。景佑の一年九か月におよぶ大旅行は無事終了した。

最初の結婚

十一月二十七日に第五次測量から帰着した景佑（20）は翌月結婚した。忠敬『江戸日記』文化三年十二月十八日の項に「高橋善助来る。金式両式分婚礼祝儀を相渡す」とあり、三日後の十二月二十一日に「此夜浅草婚礼あり」と記されている。結婚相手は墓碑によれば佐藤春貞女であった。佐藤春貞は『江戸日記』文化八年七月六日の項に「渋川へ行く、御同朋佐藤春貞に出合う」とあり、同朋であったことがわかる。同朋は江戸城の御用部屋で大名や幕閣の雑用や公文書の送達などを行い、御坊主衆を監督する役である。某阿弥と称し、頭を丸め袴を着けていたという。どのような縁での結婚かは不明だが、景保の妻（荒井平兵衛女）の家族が佐藤姓なので、その関係とも考えられる。

絵図面仕立

第五次測量帰着後は、測量結果をもとに、深川の隠宅で地図の仕立てが始まった。景佑は帰着早々から頻繁に忠敬宅に通っている。『江戸日記』の記述からは、晴天でも曇天でもやって来て、時には泊りがけで天測したり絵図の仕立をしている様子が伺える。三月に入ると「三月朔日 晴 厳島、天橋立、琵琶湖図持参厩局へ行く」とあり、出来上がった三枚の図を高橋役所へ下見に持参している。三月十五日には作図は大詰めを迎え、「此日より高橋善助、下河辺政五郎詰る」となり、月末にいに四枚の図が完成する。三月二十九日、「厳島、天橋立、琵琶湖、浜名湖図持参浅草御役所へ行く 坂部 下河辺 高橋善助同道」とあり、景佑も作図方として地図提出に同行した。以後も作図は続き、黒江町の隠宅は以下の状況であった。

先月から二階では七人、階下の座敷では高橋善助と下河辺政五郎が大盤で地図を仕立てていますので、毎日混雑して寝泊りする場所もない有り様です（中略）地図仕立に毎日司天台から三人が出役しており、内弟子は隼太、秀蔵、慶助、伊兵衛、門谷の計五人、そのほか私と庄作、子之吉という飯炊きの合計十一人です。昼食の惣菜、軽食の焼飯、茶、菓子等の世話をする者がいないので、地図の書き物やら朝暮の指図やら、私一人に世話がかって大変で困っています。（以下略）

【未公開書簡X—六（文化四年五月六日付）】
上原久は「かくて文化四年は景佑は主として忠敬の絵図面仕立の手伝いをしたらしい。」（『高橋景保の研究』）と結論している。景佑は「部屋住み」の身であったが、下役と同格の作図手当を貰い、この時の功によって後に幕府から褒美を賜った。

養子縁組

翌文化五年（一八〇八）、景佑（22）は天文方渋川正陽の養子となった。正式に幕府の縁組許可が下りたのは文化五年八月晦日のことで、「植村駿河守殿御書付を以て『天文方代々記』許可された。しかし『江戸日記』文化五年一月二十四日の項には「朝、築地渋川善助へ行く」とあり、一月にはすでに築地の渋川家に入居していたことがわかる。景佑が養子に入った渋川家はいままでもなく初代天文方・渋川春海以来の名門である。しかし、嫡子の早世と養子縁組が続いたため、天文方としては形骸化していたといわれる。諸資料を照合して渋川家の家系図を描くと、実親子は初代春海と二代目昔尹だけで、あとはすべて養子、しかも四代目の敬也を除き、渋川家の血縁ばかりである。

唯一の他家出身者である四代目敬也は入間川市十郎といい、仙台藩の微臣（人足の子という）であった。天文学に優れていたため、幼少だった嫡子則休に代わり享保十一年（一七二六）に洪川家を継いだ。家督相続後わずか八か月で急死した。毒殺されたといわれる。これ以降、洪川家はすべて敬尹の子孫が養子に入り家督を継いだ。したがって景佑は敬也以来八十年ぶりに他家から入った養子―名門洪川家が新興高橋家からやむなく迎え入れた養子―である。この縁組は一見、両家にとって好都合の良縁にみえるが、実は双方ともに勇気と決断を要したのではないかと思われる。

養父洪川正陽

景佑の養父・洪川正陽は川口家から入った養子であるが、三代目敬尹の曾孫にあたり、シーボルト事件の際に江戸払いとなった川口源次の兄である。天文方の仕事はせず、暦学の家元業のようなことをしていたらしい。『測量日記』文化九年二月

四日に「当所代官原佐太夫出る。洪川主水門人の由」という記述があり、筑前に門人がいたことがわかる。病弱だったともいわれる。文化四年以降、後妻と子をあいついで亡くし、不自由な生活をしてきた。景佑夫婦が養子許可前に洪川家に入った背景には、こうした家庭事情があった。隠居後の文化八年に剃髪して仏門に入り、「二哉」と名乗った。忠敬と交際があり、『江戸日記』には「洪川主水」「洪川逸斎」の名で登場している。『天文方代々記』によれば、文政四年六月十四日に四十七歳で病死した。この記述に基づく、正陽は安永四年（一七七五）の生まれで景佑より十二歳年長、弟の川口源次とは七歳違い、三十五歳で隠居して三十七歳で仏門に入ったことになる。

家督相続

養子縁組により「洪川善助」となった景佑は、翌文化六年七月二十二日、養父・洪川正陽の隠居により家督を相続した。この家督相続の許可は江

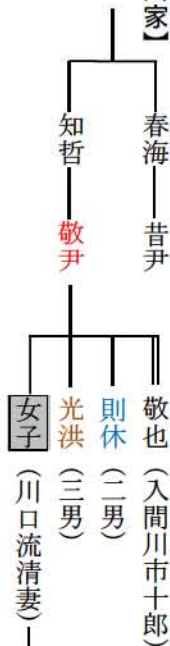
◆天文方◆

①春海―②昔尹―③敬尹―④敬也―⑤則休―⑥光洪―⑦正清―⑧正陽―⑨景佑

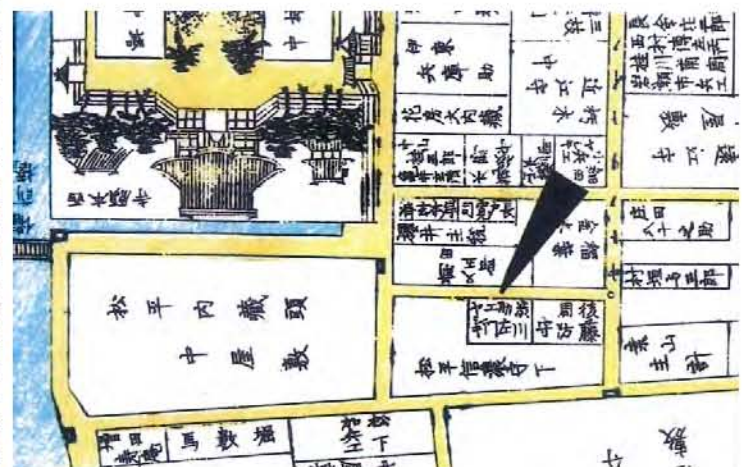
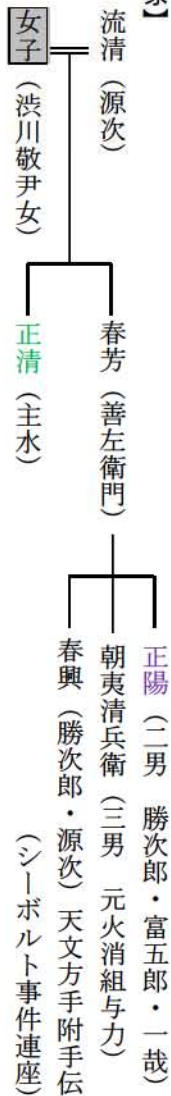
（入間川）

（高橋）

【洪川家】



【川口家】



築地・西本願寺の近くにあった洪川助左衛門屋敷
奥医師・桂川甫周の住まいも近かった（右上端）

戸城菊之間にて御老中列座の中で牧野備前守殿より申し渡された。『続徳川実紀』に「父致仕して子家をつぐ者四十人」とあり、菊之間に集合した願出者四十人中の一人として申し渡されたことがわかる。同日、御祐筆部屋で別途、天文方を仰付られた。ここに景佑は天文方「洪川助左衛門景佑」となり、二十三歳の若き洪川家当主となった。相続を境に忠敬は景佑を礼遇するようになる。家督相続直後の七月晦日の『江戸日記』には「午後高橋氏、洪川氏、大槻玄沢来る 大川治兵衛着」とあり（家督相続の祝宴か）、従来「善助」と呼び捨てだったのを「洪川氏」に格上げしている。以後、『江戸日記』の記載は「善助来る」が「洪川助左衛門殿入来」となり、文化十二年以降は「洪川助左衛門様御出」と、さらに鄭重になっている。

ランデ翻訳

家督相続後、景佑は景保から『ランデ暦書管見』の調査を命じられて文化十二年には足立左内とこれに取り組んでいたが、文政元年になって幕府から、この父至時の遺稿についての取調べに對し、役扶持五人扶持が下し置かれることとなった。

「文政元戊寅年六月廿九日術業出精仕、実方兄高橋作左衛門申合実父遺稿之暦書をも取建致候に付御役扶持五人扶持下置旨、於新部屋植村駿河守殿被仰渡」

『天文方代々記』

これは渋川家としては画期的なことであった。景佑が家督を相続した時点で渋川家の家禄は二十五俵、天文方の職務はしていなかったので役扶持はついていなかった。しかし、このたび五人扶持を給されることにより、渋川家は天文方として機能を回復し、面目を取り戻したことになる。

『ランデ暦書』の翻訳はこのあと十余年の年月を費やしておこなわれ、文政九年（一八二六）四十歳のときに『新巧暦書』全四十巻として完成、十年後の天保七年（一八三六）に幕府に上呈された。この間、景佑の学術的著書は文政十一年（一八二八）の『暗厄利亜航海暦』のみで、五十歳まで業績欄は空白である。三十代から四十代は翻訳事業に専念したようである。『ランデ暦書』の翻訳は景佑の学究人生の大きな部分を占める。

この時期、私生活では、景佑二十六歳の時に妻が亡くなり数年のうちに再婚、長男敬直が生まれている。忠敬は毎年測量の旅に出ていたが、江戸にいたときには渋川家への挨拶回りを欠かさず、また景佑もよく忠敬宅を訪れている。忠敬宅は実家のように、景佑の心の支えとなっていたと想像される。しかし文政元年四月、忠敬は七十四歳で

死去する。母志勉、父至時を早くに亡くし、祖父のように親しんだ忠敬も亡くなってしまった。このあと養父正陽、妙薫、忠誨、景保と、周囲の人々が次々に亡くなったので、景佑の周囲は次第にさびしくなっていたと思われる。

景佑の忠敬伝

忠敬の没後、文政四年に源空寺に墓碑が建てられた。この墓碑文が伊能忠敬の正式の伝記として最初のものだとされる。景佑の業績の一つはこの墓碑文のもととなる小伝を残したことである。景佑が関係したとされる小伝は三種類が知られており、その一つ「渋川景佑述、撰『伊能翁見聞記』」は、景佑が忠敬について語った事柄を弟子が記録したものである。「夕方になるとあわてて家に帰るので、脇差や懷中物を忘れて行く話」をはじめ、忠敬の身近で見聞きした逸話が具体的に書かれている。「東岡先生を尊敬する事、父の如し。江戸に在る時は浅草源空寺の方に向ひ、西国に在る時は東方に向ひ、毎朝合掌して父母と共に拝す」という逸話は、測量行中、忠敬と同室していて実際に見たことを記したものであろう。全篇にわたり、いささか個性が強かった忠敬の姿を温かく、敬愛の念をもって描いている。また『東河伊能翁行状』は忠敬の出自、経歴、業績等を漢文読み下し調で述べたものであり、『東河伊能翁伝』（渋川景佑草稿 文政四年）は前記の二つの小伝を併せて漢文で記したものである。佐藤一斎はこれらの伊能翁伝をもとに、忠敬の墓碑文を撰したといわれる。

『伊能翁見聞記』に、忠敬は「尊敬すべき人との対話に及んでは、（略）ひとつとして礼に外れることはなかった」とある。景佑と忠敬は、親しき



上野・源空寺墓地東南隅の無縁仏区域に残る
高橋景保の長男小太郎（景僕）の妻と子孫の墓

中にも礼を外さない関係だった。香取市の伊能忠敬記念館に保管されている書状に「東河先生閣下助左衛門拜」と書かれたものがある。忠敬が景佑を礼遇したことは前述したが、景佑も忠敬を「閣下」と敬称していた。二人はお互いに尊敬し合い、終生麗しい関係を構築した。景佑の忠敬観が後世の忠敬像の原型となっているのは喜ばしい。

シーボルト事件

文政十一年、景佑四十二歳のとき「高橋一件」すなわちシーボルト事件が起こる。景保が逮捕され、景保の長男小太郎と次男作次郎は遠島、天文方の下役をはじめ、周囲の関係者をも巻き込んだ大事件となった。景佑にも少なからぬ影響が及び、以後の活動にさまざまな制約がかかったといわれる。しかし景保の実弟であるにもかかわらず、景佑は

公には全く何の咎も受けることがなかった。これは日頃の慎み深い出処進退の故だといわれる。事件後、景佑は小太郎らの赦免に奔走し、また断絶した高橋家を再興するため、小太郎の次男(妾腹)に高橋家を嗣がせることを考えていたという。間重新の景佑あて書簡『天文暦学諸家書簡集』天保二年七月二十四日)には小太郎の遠島中、「お菊老女」という女性がこの小太郎の次男を連れて大坂の青木家に身を寄せたことがみえる。この「お菊老女」とは誰であろうか。この人こそ、冒頭で述べた「母親代り」の女性ではないだろうか。そうだとすると、このとき推定年齢八十歳近く。この三十余年の高橋家の浮沈を見てきたことになる。息子のように育てた景保は獄死し、小太郎も遠島となった。よるべない身となり、故郷大坂に帰っていったのであろう。

測量御用と天保改暦

天保七年、景佑(50)はラランデ暦書を翻訳編集した『新巧暦書』四十冊『新修五星法』十冊を幕府に上呈した。これまで専念していたラランデ暦書翻訳が終了し、以降は著書や御用が増えてくる。天保九年、かつて高橋家に属していた測量御用が景佑の取り扱いになった。シーボルト事件以降、当時の天文方で測量に熟達していた者は景佑以外になかったからである。五人扶持が下された。「同九戊戌年十月八日、測量御用相勤可申、御用相勤申候間御役扶持五人扶持被下置旨、於新部屋御同人被 仰渡」『天文方代々記』

同年、幕府は九段に測量所を作り、天体観測を命じた。併せて父の『寛政暦』の理論をまとめるように命じた。翌天保十年、景佑は鉄砲筆筒奉行



格(四百俵)を仰せつかる。そして天保十二年、幕府は『新巧暦書』にもとづく改暦を景佑に命じた。寛政暦施行後四十年を経て、暦の記載と天体の運行に相違が生じるようになっていたからである。景佑は五十五歳でこの仕事に取りかかり、翌天保十三年に完成する。『武江年表』天保十三年(一八四二)の冒頭には「新暦頒行(天保壬寅暦といふ)とある。天保十五年一月一日から施行された。嘉数次人は「天保の改暦事業は、天文方の四十年にわたるラランデ暦書研究のクライマックスと言うべきものである」と述べている。天保暦は『新巧暦書』すなわち『ラランデ暦書』の理論にもとづいて作成された。ラランデ研究と天保暦作成は景佑の天文暦学研究の双峰と言うべきであろう。

渋川敬直一件

景佑の天保改暦を助けた嫡男渋川敬直(六蔵)は俊才であった。素読吟味で賞を受け、オランダ語にも堪能であった。十七歳で天文方見習となり、水野忠邦に認められて天文方見習のまま御書物奉

行に就任するという異例の昇進をした。天保改革に際して鳥居耀蔵らとともに「水野の三羽鳥」と呼ばれ、改革の中心人物として活躍した。蛮社の獄の弾圧にも関与したと言われる。天保十年、水野忠邦に「蘭学取締」の意見書を提出、度々建言をするなどして政治に関与し活躍するが、水野の失脚に伴って罪に問われ、臼杵稲葉家にお預けとなった。鳥居耀蔵と組んだことで反感を買ったともいわれる。鳥居は林大学頭述斎の息子であったが、蛮社の獄で厳しい弾圧を行い、陰險な性格もあって忌み嫌われた。景佑は敬直が天保の改革で活躍している時期に改暦御用で京都に出張した。その頃、敬直との間で交わした書簡が残っているが、景佑と敬直は親子というより、まるで仲の良い親友同士のような間柄である。しかも、書簡の内容をみると、敬直が行なった進言は景佑の意見を反映したものであった。敬直の配流に、景佑は痛恨の思いであっただろう。しかし驚くべきことに、実父であるにもかかわらず、景佑は今回も一切何の罪にも問われることがなかった。のみならず、敬直を廃嫡し、次男の佑賢を惣領にすることを願い出て、これも許されている。敬直は六年後、配流先で三十七歳で病死した。



臼杵・多福寺 渋川六蔵墓

業績と評価

景佑の天文暦学における業績は著しい。著書は百冊以上あり、その数は近世天文学者で随一とされる。幕府の信任の厚さも目を見張るものがあり、景佑が生涯で賜った褒賞は金十枚、白銀一二七枚、時服二、紗綾二巻、縮緬二巻に上る。特に晩年に集中していて、あたかも怒涛のようである。五十三歳のとき、鉄砲筆筒奉行格（四百俵）を仰せつけられた。著書は天文暦学の学術書以外に『暦学見聞録』『星学手簡』その他観測記録などがあり、それらは我が国天文史の貴重な資料となっている。○『遠鏡町見手引草』景佑の著書の中に測量法の解説書『遠鏡町見手引草』（弘化四年）があり、その中に第五次測量に従事した際の経験談が述べられているのでここで紹介したい。

「今を距る殆んど四十餘年、余伊能勘解由と廻浦し紀州熊野浦に至る時に、海岸十餘町の間絶壁にして沿海里数を測るを得ず、就て俄に衆評し終に遠眼鏡の内に容る、平行線に依て町見するの法を考へ得たり」（『遠眼鏡にて町見する法を發明せし事』）

伊能隊が熊野浦を測量した時に海岸が絶壁で測量できなかったが、その場で知恵を出し合い、望遠鏡の平行線を利用

用して距離を割り出す方法を案出した、という。下は、その方法の説明図である。景佑は序文でも「困窮すれば自ら發明することあり」として熊野浦の逸話に言及

用望遠鏡平行線測馬之全體得十一條圖



し、このときの経験が「胸臆ニアルヲ筆シ、『遠鏡町見手引草』ト名ツ」けて、この書を著したと述べている。『測量日記』文化二年六月二十六日の項に、尾鷲早田浦から三木崎の海岸は「巖石そびえ測量難成」と記されている。ここは市野金助が「病氣」になった所である。六十歳の景佑の胸裏にあった十九歳当時の記憶が書物となって、伊能測量法的一端を伝えている。

景佑の人物像

景佑は兄景保との対比で語られることが多い。奔放で豪胆で多才な政治家だった景保に対し、景佑は几帳面で慎重な天文暦学専門家であったといわれる。これに加えて、伊藤節子が興味深い指摘をしている。景佑は、それまで一子相伝で伝えられてきた学問を手付手伝たちにまで広げ、また観測録の中ではそれぞれの観測器を扱った手付手伝たち各々の氏名を明記して、観測した人びとを重視しているという。『幕府天文方渋川景佑と大村藩天文学者峰源助の学問的交流』。たしかに、景佑は部下を含め、他者に対する敬意を多く持ち合わせているように感じる。『星学手簡』をはじめ、他者の業績を記録して顕彰した著作は、その表われであるといえよう。伊藤は、研究ノートのような著作は、景佑が得た知識を他に広めることを意図していたとも指摘している。（同書）景佑には逸話の類が少なく、わずかに峰源助に「秘図」の複写を許した話が伝わっている程度である。温和な人柄であったようだ。しかし一方、間重新の景佑あて書簡に「閣下之御癩癩御尤も二御同意ニ奉存候」とあり、時には癩癩を起すこともあったらしい。もう少し資料がほしいところである。そこで

景佑の人物像の把握にすこしは役立つかもしれないと思い、日記や書簡に見える景佑の姿を拾ってみた。

『江戸日記』や書簡をみると、なぜか景佑には食べ物に関する記事が多い。『江戸日記』文化四年一月十四日の項に「曇 高橋善助弁当持参」とあり、善助が隠宅での絵図面仕立の際に弁当を持参したことが当日の特記事項として記録されている。また、景佑の伊能家あて書簡に「かねて依頼の御在所産味噌到着の由……家来兩人、受取りに差出す」（『世田谷伊能家伝存 伊能忠敬関係文書目録』〇四六）というものがあり、景佑が御当地味噌の取寄せを依頼していたことがわかる。さらに、『江戸日記』文化十二年五月十九日に「渋川様御出 蕎麦上申候」という記事があり、日記に食べ物が登場する稀有な例となっている。先の弁当持参の件は、景佑は忠敬が用意する昼食が気に入らず、弁当を持参したのである。『夜中測量之図』を見ると、景佑はふつくらした体形に描かれている。美食家だったのではないだろうか。

景佑の家族

景佑は二度結婚し、妻が二人いた。最初の妻佐藤氏は文化三年十二月に結婚、五年後の文化九年四月廿三日に没した。景佑が文化十四年七月に記した『渋川世諡録』には「輪性院轉室妙貞大姉 渋川助左衛門源景佑妻 佐藤春貞女」とある。二度目の妻は朝比奈氏であった。結婚の時期は不明である。『天文方代々記』の渋川六藏敬直の母親の項に「景佑妻 小普請組 朝比奈藤八郎良寛女」とあり、また『蠻蕪子』には「渋川助左が妻は朝比奈貞衛門が女 貞衛門ハ従弟也」とある。なお『江

戸日記』文化十一年六月十二日に「浅草御手附朝比奈定右衛門」が登場しているが、景佑妻との関係は不明である。

景佑の子は文化十二年生まれの長男敬直、文政十一年生まれの次男佑賢、ほかに女子が一人いて御徒歩組天文方手附金子半七郎に嫁した。女子の生年は不明だが、敬直と佑賢は二度目の妻朝比奈氏の子である。このほか『渋川世諡録』には文政七年正月二十八日の日付で「春夢妙現嬰女」が、「聞法院常信義質居士」の戒名で「天保十二年辛丑八月十六日 九代 渋川助左衛門次男」が記されている。「實一哉院四男」と添書があるので養父渋川正陽（一哉）の四男（信四郎）を養子にとり景佑の次男にしたようだが、先に死去した。

没年と墓

景佑の没年月日は、東海寺の過去帳及び墓碑には安政三年六月二十日と書かれている。一方、『天文方代々記』には景佑が安政四年三月二十九日に家督を次男佑賢に譲って隠居を許され褒美を賜わったとあり、『続徳川実記』にもこれに対応する内容の記事がある。墓碑との食い違いについて、伊能忠敬と同様に何らかの事情で喪を秘したものであり、没年月日は墓碑のとおり安政三年六月二十日が正しいとする「秘喪説」が有力である。

景佑の墓は品川・東海寺の渋川家墓所にある。

墓碑の中央に景佑「大機院仁翁滄州大居士」、右に四代目敬也（入間川市十郎）「看月軒孤峯紹白居士」、左に長男敬直「靈照院月峰宗圓居士」と、三人の戒名が彫られている。敬也もかつては独立の墓があったが、ある時期に墓が整理され、景佑の墓石に敬也と敬直の戒名が追刻されたものという。

おわりに

松浦静山『甲子夜話』の中に第五次測量の命が下った頃を思い出して記した記事がある。

「過し文化二年の春、国々測量の命下りしとき、西国衆へ書達あり。…今旧筐に得てこ、にしろす。此頃までの世の有さまは、すべて何事も盛んなりしことどもなりき。」（『甲子夜話』巻28国々測量）

平戸藩主の静山が、昔の書類箱の中から出てきた文化二年の西国大名あての全国測量通達書を手にしてその当時を思い起こし、文化初年頃は「すべて何事も盛んなりし」と述懐している。第五次測量は、何事にも意欲的だった当時の風潮が背景にあった。第五次測量に参加した景佑の胸裏には、この時代の熱気が終生残存していたのではないだろうか。景佑の静かだがたゆみない活動の熱源が、そこにあっただのではと思えてならない。（了）

東海寺・渋川家墓所

説明版が立っているのが
初代春海の墓
奥の通路をはさんで最初
が景佑の墓



渋川景佑の墓
他の墓よりやや大きい



【参考文献】

- 『高橋景保の研究』 上原久著 講談社
- 『伊能忠敬』 大谷亮吉 角川書店
- 『寛政重修諸家譜』 續群書類従完成会
- 『天文方関係史料』 大崎正次編 非売品
- 『伊能忠敬研究』第34号 荻原哲夫 伊能研究会
- 『伊能忠敬研究』第37号 伊藤栄子 伊能研究会
- 『日本洋学史の研究1・5』有坂隆道 創元社
- 『天文曆学諸家書簡集』上原久他 講談社
- 『幕府天文方渋川景佑と大村藩天文学者峰源助の学問的交流』 伊藤節子 国立天文台報
- 『浅野家所蔵・天文方渋川家文書』国立天文台蔵
- 『浅野家所蔵「天文方渋川家文書」の調査I・II』 中村士 伊藤節子他 国立天文台報 Vol.1, No.4
- Vol.2, No.4 国立天文台
- 『東山集』 岡台輔編 仙台市民図書館蔵
- 『「東山集」余録 渋川敬也の死をめぐって』 青木千枝子 仙台郷土研究通巻251号
- 『天文方と陰陽道』林淳 山川出版社
- 『洋学5』「天文方、渋川景佑の天保改暦京都書簡」中村士、伊藤節子 洋学史学会 八坂書房
- 『伊能忠敬書状』伊能忠敬記念館 香取市
- 『測量日記』 佐久間達夫 大空社
- 『江戸日記』「江戸の伊能忠敬」伊能忠敬研究会
- 『遠鏡町見手引草』渋川景佑 国立国会図書館蔵
- 『伊能忠敬の科学的業績』保柳睦美 古今書院
- 『先祖書』 高橋作左衛門 国立公文書館蔵
- 『続徳川実記』 徳川実記研究会編 吉川弘文館
- 『江戸の天文方』中村士 天文月報第86巻第12号
- 『天文方のラランデ天文書研究』「天文月報」第98巻第5号 嘉数次人 日本天文学会
- 『甲子夜話』 松浦静山著 東洋文庫 平凡社

江戸幕府日記を読む①

国々測量地図取調骨折候付被下

前田 幸子

文政四年九月十八日

天文方

銀十枚

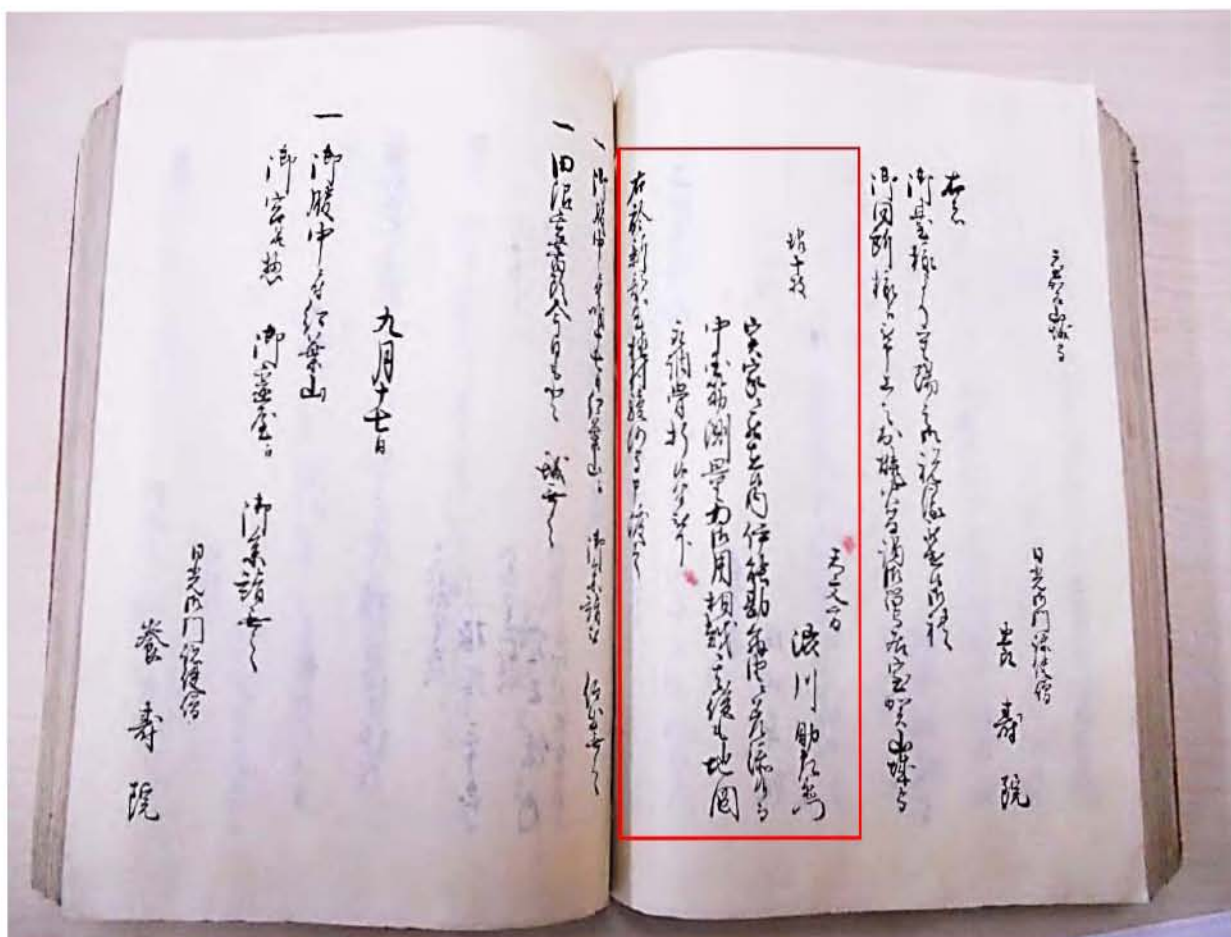
渋川助左衛門

実家二罷在候内 伊能勘解由二差添候而

中国筋測量為御用相越其後も地図

取調骨折候付被下

右於新部屋種村駿河守申渡之



御書物奉行

天文方 兼帶

時服二

高橋作左衛門

伊能勘解由国々測量地図取立候御用筋

引続取扱骨折候付被下

右於同席同人申渡之侍座同前

表火之番

銀三枚

岡田東輔

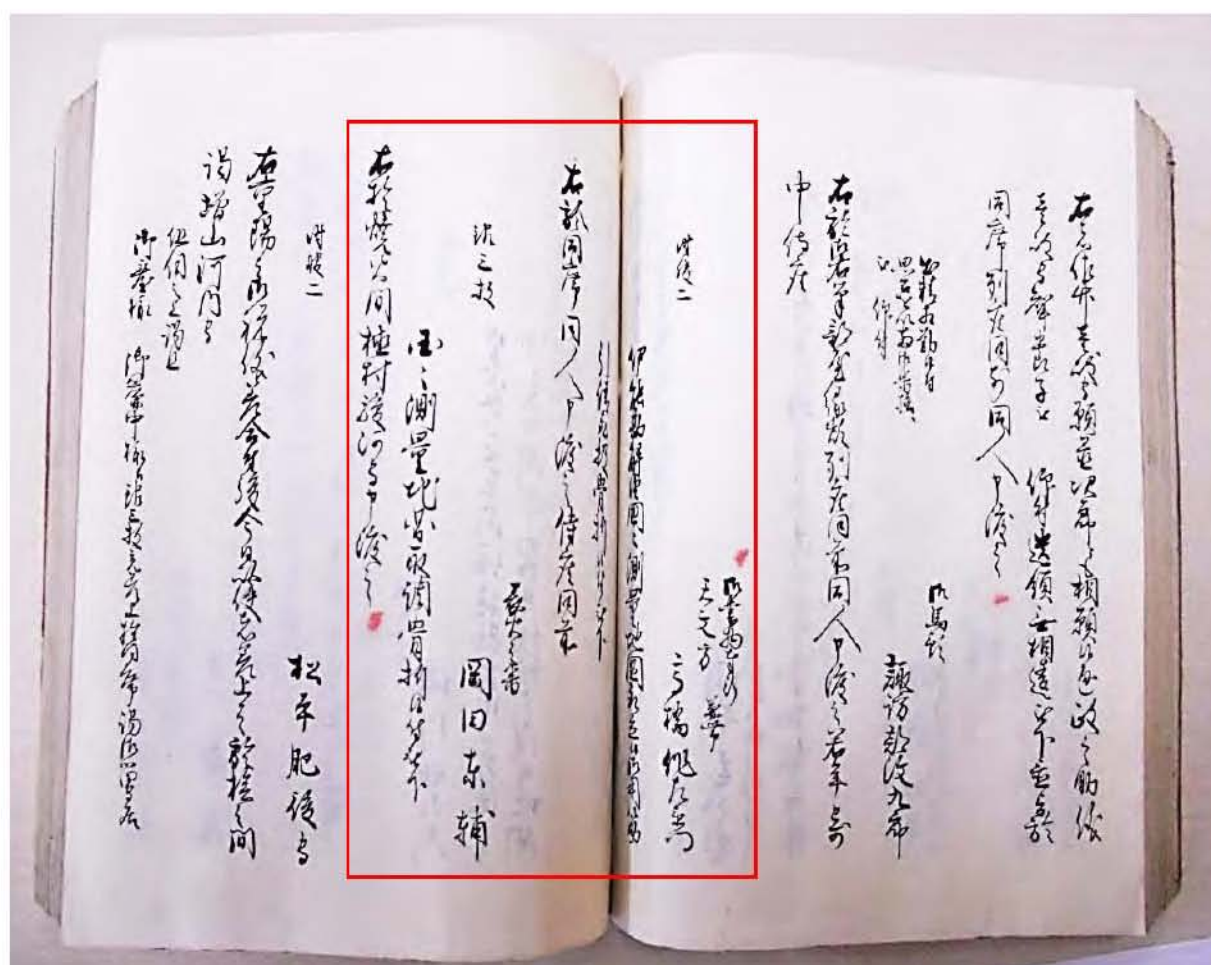
国々測量地図取調骨折候付被下

右於焼火間種村駿河守申渡之

【江戸幕府日記】

「江戸幕府の諸役所で公務の内容を記録した日記類の便宜的な総称。代表的なものは『御用部屋日記』と本丸および西ノ丸の『右筆日記』である。現在、江戸幕府日記は内閣文庫に最も多く保存されている。同文庫所蔵の幕府日記は二千数百冊にのぼるが、その中には種類・系統・年代のまちまちな各種の日記が含まれている。そのうち最も著名な一群は『柳営日記』の内題をもつ七百七十一冊の本で、その外題は単に『年録』と題する。『國史大辞典』（抄）

※本稿の江戸幕府日記は国立公文書館・内閣文庫所蔵のものです。



「修身」の教科書に書かれた伊能忠敬

高安 克己

かつて日本の小学校に「修身」という教科があった頃、伊能忠敬が教材に取り上げられていたことはよく知られている。

先日、島根大学ミュージアムを訪問した際に、「教育学部の資料を整理していたら面白いモノが出てきた」といつてみて頂いたのが、その修身の教科書。明治三十四年八月十日に発行された改定再版（初版は同年七月七日発行）の『尋常小学校修身科児童用教科書』全四巻で、同年八月十六日文部省検定済となっている。

いったいどんな風に伊能忠敬が紹介されているのか、興味があつたので早速、ページを繰ってみ



『尋常小学校修身科児童用教科書』島根大学ミュージアム所蔵

「忠敬先生」は巻三に四回に分けて挿絵付きで登場する。すでにご覧になった方もあるかと思うが、ここに全文を紹介しておく。

第十八 伊能忠敬先生 一

伊能忠敬先生は、十八さいのとき、伊能氏のよろしとなられたり。

そのとき、伊能氏は、まづしかりしに、先生、よく家業をつとめられしかば、四十さいのころには、ゆたかなる家となりたり。

かせぐにおひつく、びんぼうなし。

第十九 伊能忠敬先生 二

忠敬先生は、家をゆたかにせられたる後、五十さいのとき、江戸に出て、高橋東岡先生のでしとなられたり。

そのとき、東岡先生は、三十二さいにて、師弟の年、さかさまなり
けれども、
先生は、すこしもはづかしとおもわず、一心に学ばれしかば、学問、師にまさるまでに、すまされたり。



第十九の挿絵（手前が忠敬か？）

第二十 伊能忠敬先生 三

忠敬先生は、ばくふのおほせをうけ、十八年の間、山をこえ、海をわたり、かんなんしんくして、国々をそくりよし、つひに、たゞしわが国の地図をつくられたり。

その後、西洋人、わが国に來りて、先生の地図のたしかなるを見て、大にかんしんしたり。

第二十一 伊能忠敬先生 四

忠敬先生。七十四さいにて、死なれたるが、そのときまでも、地図をつくることを、つとめられたり。

先生つねに、師の恩をわすれず、死にのぞみて、『わが一生のてがらはすべて、師のたまものなり。われ死なば、師の墓のかたはらにうづめよ』と、いひのこされたり。



第二十一の挿絵（おそらく忠敬の肖像）

全四巻を通して、いわゆる偉人・賢人のエピソードが数多く取り入れられている。巻三について言えば、忠敬の他にご存じの二宮尊徳や、戦時中「日本婦人の模範」とされた江戸初期の医師の妻・稲生はる子、天明の飢饉で私財をなげうって

人助けをした鶴岡藩士・鈴木今右衛門などが登場し、兄弟愛や父母に対する敬意、民に対する博愛の精神、望ましい女性像などが時の政府のメッセーじとして垣間見られる。忠敬先生の逸話では「公德心」を大切にせよ、ということらしく、それで最後に墓の話が出てくるのも何となく頷ける。

少なくとも伊能忠敬についての記述に大きな間違いはないと思われるが、往々にしてこうした書き物では「偉人」のごく一部の側面を強調したり、根拠希薄なまま書き手の目的に沿って改ざんされていたりする。また、場合によっては、それが伝説化し、いつのまにか真実であったかのような錯覚を読み手に与えてしまうことさえある。そうになると、地下鉄の吊り広告から始まった「江戸しぐさ」なるものが、根拠のないでっち上げだった、と言うことと同類である。

今、三年後に予定されている学校教育における「道徳の教科化」にむけて、文部科学省では教科書作成の指針となる指導要領や検定基準のツメをしているようだ。日本の若者に心得て欲しいのはモラル(moral)や倫理観(ethics)であって、「道徳」とは違うような気がする。「道徳科」は何となく戦前の「修身科」のにおいがして、私にとしては抵抗があるのだが、教科書をどうしてもつくるというのであれば、妙な伝説を生むような記述は絶対にさけていただきたいと思っている。

話がだいぶそれてしまったが、そんなことを考えながら「修身」教科書をめくってみて、忠敬先生も含め、「偉人」たちの本当の姿を確実な根拠に基づき客観的かつ冷静に評価していくことがいかに大切なことか、と言うことを再認識させられた次第である。

本の紹介

『中国地図測量史』(中国測繪史)編集委員会編

日本地図学会 中国地図情報専門部会 校訂

今村遼平 訳

本書は中華人民共和国建国五〇周年にあたり、国家測繪局が総力をあげてあちこちに散在している五千年来の膨大な量の測量資料や文献を集め、全三巻・二分冊にまとめ上げた大著のうち、一巻と二巻(三皇五帝の時代から清代末まで)を訳出したものである。訳者の今村氏は地盤工学の分野で活躍する著名な技術者であり、また中国の歴史や文化に造詣が深いことでも知られる。非常にわかりやすい訳文に加え、各ページに添書された訳者の丁寧な註は、中国文化や歴史に疎い読者にとって理解を大いに助けている。ちなみに訳書の巻頭言は伊能研の前代表・星埜由尚氏によるもので、「・・・中国の古代からの測量・地図に関する制度・技術等について、その流れを知ることができ、

ともすれば西洋における近代測量・地図の歴史に偏りがちな我々の知識に東洋における測量・地図の源流である中国の測量・地図史の物語を加えることができるのは大変喜ばしいことである。」として本書を絶賛している。全巻を通して前案から清代までの測量機構・組織、測量技術、具体的な成



果などについて詳しく述べられており、巻末には訳者による参考文献、用語解説、人名・用語別の索引がまとめられている。原本の第三巻には中華民国時代以降のことが書かれているが、この時代の測量技術は特に世界をリードするようなものは見られない、ということもあって訳出されていない。それでも本訳書は七〇〇頁あまりの大著で、私はまだ読破するまでに至っていないが、拾い読みしているうちに私の長年の疑問を解く糸口をつかんだような気がする。

それは伊能忠敬の測量法に関することで、今村氏も「訳者のことば」のなかで「伊能図のちやうど一〇〇年前に基準点測量の多くに天文測量や測算の成果を使つて、伊能図以上の精度であの広大な中国全土の地図《皇輿全図》の作成が終わっている」と述べているように、当時の中国ではすでに三角測量が主流であった。にも関わらず、なぜ伊能は導線法や交会法に固執し、地球の球面をほとんど無視した投影法で作図したのか、ということである。そうした問題点については高橋至時の指摘もあつてすでに気づいていたとされているが(例えば『伊能図に学ぶ』一三七頁、一六七頁など)、旧来の方法を踏襲したのは、日本の複雑な地勢に加えて、おそらく幕府の地図測量に関する見識の低さと組織的な測量体制の未整備によるものではないかと思われる。わが国で三角点測量が導入されるのは明治四年、工部省測量司が英国人技師の指導で開始した東京府下の測量からである。

(高安克己)

なお、本書は訳者の自費出版であり市販されていない。入手方法等は左記に問い合わせされたい。

riimamura@ajiko.co.jp

伊能忠敬没後二百年記念誌発行に向けて ―各地の記念碑・標柱等紹介(五)―

二〇一三年秋より、全国の市町村『伊能忠敬測量日記』中の宿泊地)に、伊能忠敬関係の記念碑・案内板・標柱・史料・文献・宿所情報などを問う調査書を送り、多大なるご協力をいただいていた。厚くお礼を申し上げます。

記念誌には、すべての記念碑・案内板・標柱等を一覧表にして掲載する予定ですが、写真は一部掲載になります。そこで、会報に随時紹介することになりました。旅行や仕事で現地にお出掛けの際は、是非とも訪ねてみてください。

一、愛知県海部郡飛島村

飛島村は、愛知県の西南部、海部郡の南東端に位置し、伊勢湾に面しています。その面積のほとんどが開墾された土地です。北部は農村地帯、南部は臨海工業地帯となっており、昔ながらの田園風景と、名古屋港を中心とした貿易の拠点としての機能が共存している村です。臨海工業地帯には、輸送関連会社・倉庫会社・木材関連事業所・鉄鋼関連事業所・火力発電所などが立地しており名古屋港の物流の重要な地域となっています。(飛島村ホームページ等)

①名称 標柱「伊能忠敬測量之跡」・説明板・方位石

②説明文 「(前略) 中部地方へは、享和三年(一八〇三)五十八歳の時に第四次測量で訪れており、その記録が「測量日記」に残っています。



御嶽山・恵那山・本宮山への方位が示されている

飛島村へは、その年の五月八日午後到大宝新田に到着、長尾治右衛門宅に五月十一日まで宿泊し、滞在中は雨のため地図を作成したことが日記に記されています。

明治以降、陸地測量によって正確な日本地図が完成しましたが、忠敬の実測図を基礎にして作られたものでした。

私たちは忠敬の実測ゆかりの地に碑を建て、後世にその偉業を伝えます。

平成二十二年三月 飛島村教育委員会

③設置場所 愛知県海部郡飛島村大宝一丁目地内(県道104号新成弥富線の歩道)

④設置年月日 平成二十二年三月

⑤設置者 飛島村教育委員会

⑥設置の背景・経緯 平成十八年六月議会の中で、伊能忠敬が本村で四日間滞在し測量していることを史跡として残り後世に伝えるはどうかとの質問を受け、八月の文化財保護審議会により設置計画が決定した。その後調査を経て現在の標柱等を設置した。

⑦見学の可否 随時可能

伊能忠敬測量之跡

伊能忠敬が歴代の研究を志したのは五十歳の頃で、西洋の魔法・測量の技術に精通し、生涯の仕事として日本全土を測量し地図を作ることになりました。

この大事業は、寛政十一年(一八〇〇)から始められ、地図が完成したのは、忠敬の死後三年余の文政四年(一八二二)でした。

中部地方へは、享和三年(一八〇三)五十八歳の時に第四次測量で訪れており、その記録が「測量日記」に残っています。

飛島村へは、その年の五月八日午後到大宝新田に到着、長尾治右衛門宅に五月十一日まで宿泊し、滞在中は雨のため地図を作成したことが日記に記されています。

私たちは忠敬の実測ゆかりの地に碑を建て、後世にその偉業を伝えます。

平成二十二年三月

飛島村教育委員会

二、兵庫県宍粟市

(愛知県飛島村教育委員会生涯学習課提供)

宍粟市は兵庫県中西部に位置し、北は鳥取県、西は岡山県と接しています。京阪神と中国地方を結ぶ中国自動車道と、山陽と山陰を結ぶ国道29号が地域内で交差する交通の要衝です。その大部分を山地が占めており、兵庫県下最高峰の氷ノ山など、1,000メートルを超える山々がそびえ、豊かで美しい自然資源や風景が、四季折々の風情を織りなしています。(宍粟市ホームページ等)

①名称 「伊能忠敬日本地図製図の地」

②碑文 「文化十年(一八一七)十一月伊能忠敬一行の天文方が山崎周辺の測量を実施。その実測を基に光泉寺本堂で「大日本沿海輿地全図」を作成しました。忠敬一行には、坂部

貞兵衛、永井勘左衛門、川谷清治郎と人足、山崎藩から役人及び三十一人の人夫が出役して測量に協力。一行は向いの橋屋と伊勢屋を宿としました。製図場の光泉寺へ見物人がつめかけましたのでお触れを出して禁じました。それでも見物人が絶えなかつたので戸板で囲い製図した等々と庄家文書「天文方御巡回覚日記」などに記されています。」

- ③設置場所 宍粟市山崎町山崎36 光泉寺境内
- ④設置年月日 平成十五年四月
- ⑤設置者 (宗) 光泉寺
- ⑥設置の背景・経緯 光泉寺本堂にて製図。庄家文書新発見に伴い碑を設置。
- ⑦見学の可否 随時可能



(「宍粟市歴史資料館」提供)

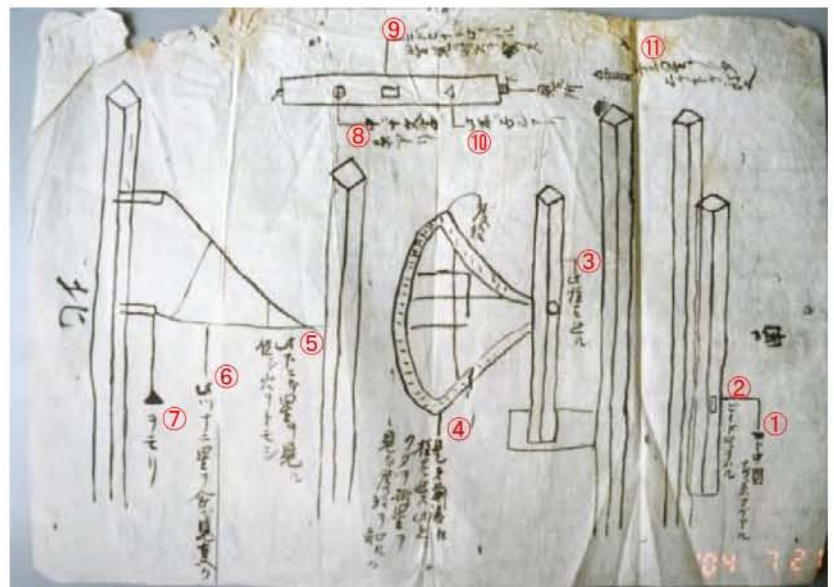
※ 宍粟市歴史資料館から『伊能忠敬一行の山崎来藩』(山崎古文書同好会編集・発行 平成十六年)をいただいた。「庄家文書」二七点の解説文が掲載されている。

『伊能忠敬測量日記』によると、山崎測量は別隊が行ったため光泉寺では天文測量は無かつた。とすれば、製図作業は宿所の橋屋で行つたのではないだろうか。夜食を差し出したとも記している。貴重な地域史料である「庄家文書」研究の更なる進展を期待したい。

「庄家文書」の中に「測量器の図面」がある。地方測量関係史料は数多く発見されているが、測量機器の図はそう多くはない。よく知られているのは、広島県呉市入船山記念館寄託の「浦島測量之図」、富山県射水市新湊博物館蔵・石黒信由著『測遠要術』『測遠用器之巻』である。この二点に比べると図は精密さを欠くが、中象限儀に付属する方筒の望遠鏡の説明や「掛柱も廻る」ことが記されていて興味深い。意味不明な点もあるが、大谷亮吉著『伊能忠敬』の中象限儀の説明と合致する部分もある。



中象限儀 (『忠敬と伊能図』より)



「測量器の図面」(「庄家文書」より)

「測量器の図面」説明文(傍線と※は筆者)

- ①マド中■前二糸サゲアル
- ②※ビイドロニテハル (※ガラス)
- ③此柱共二廻ル
- ④是ハ前後へ柱共二廻ス 此上ニ※クダヲ掛星ヲ見テ度数ヲ知ルカ (※望遠鏡のことか)
- ⑤此下ニテ星ヲ見ル 但シ火ヲトモシ
- ⑥此ツナニ星ヲ合セ見事力
- ⑦ヲモリ
- ⑧中二十文字ニ糸アリ
- ⑨マド ビイドロヲハル 星見ル時 火ヲウツス

⑩ 此所ニネジアリ
⑪ ネジ 星ラクダ上ケ下ケ致也

三、兵庫県佐用町

佐用町は、兵庫県の南西部に位置する町です。平成十七年（二〇〇五）十月に、佐用町、上月町、南光町、三日月町が合併して誕生しました。高山城、上月城、米田熊見城、三日月陣屋等の城跡のほか、宿場町であった平福にある土塀や商家の町並み、乃井野の町並み等といった多彩な歴史資源を備えています。また、清流千種川や佐用川が流れる良好な自然環境、美しい星空も見どころのひとつです。（佐用町ホームページ等）

① 名称 「伊能忠敬宿泊之地碑」

② 碑文

（表）「伊能忠敬宿泊之地」

（裏）「忠敬先生測量日記 文化十年十二月二十三日 松平主馬知行所 横坂村 真言宗 常光寺 七つ時止宿 幕命で一八〇〇年」

十六年 全国の沿岸を測量し「大日本沿海輿地全図」の制作に当たった 原本 兵庫県史編纂室

（側面）「平成十六年四月吉日 住職十五世泰栄」

③ 設置場所 佐用町横坂161 常光寺境内

④ 設置年月日 平成十六年四月

⑤ 設置者 常光寺

⑥ 設置の背景・経緯 兵庫県史に伊能忠敬宿泊地の記載を見つけ建てた。寺には記録なし

⑦ 見学の可否 随時可能



（兵庫県佐用町教育委員会提供）



伊能忠敬隊は見た！

豊岡市に今も残る但馬国分寺旧跡の塔礎石

第八次測量の帰路、文化十一年（一八一四）一月十九日の『伊能忠敬測量日記』には、出石領国分村に「国分寺旧跡 田地中に柱の敷石三つあり」、山本村「田中に法花寺尼寺旧跡あり 柱礎七つあり」と記されている。この測量は永井甚左衛門・箱田良助隊が行ったので、忠敬自身はこれらの礎石を見てはいないと考えられる。

ところで、この十個の礎石は現在もあるのだろうか。兵庫県豊岡市教育委員会に問い合わせてみた。すると、「豊岡市立歴史博物館―但馬国府・国分寺館―」（今年四月一日改称）から返信をいただいた。「但馬国府・国分寺館ニュース 第二号」（二〇〇五年）には、「第一回ミニ企画展―伊能忠敬の見た但馬―」が特集されていて、これらの礎石について次のように記されている。

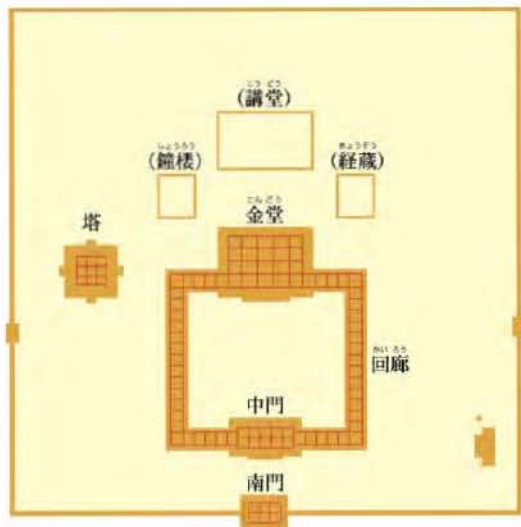
文化十一年（一八一四）年から二〇〇年経った今、但馬国分寺跡・国分尼寺跡に残る礎石は、それぞれ二点ずつ。他はどこへ行ったのでしょうか。多くは国分寺跡周辺の学校・民家をはじめ、出石の宗鏡寺、福成寺などに運ばれ、庭石や台石として使われています。また遠くは、京都市左京区にある橋本閑雪記念館にも、但馬国分寺跡出土と伝える礎石が残されています。

※「但馬国府・国分寺館ニュース」（創刊号／四〇号）

は館のホームページで閲覧できる。

礎石の現況を示す画像もいただいたので、次に紹介したい。

天平十三年（七四一）に聖武天皇が出した国分寺建立の詔を受けて、但馬でも国分寺・国分尼寺



但馬国分寺伽藍配置図



③と④に礎石が残っている
(但馬国府・国分寺館パンフレットより)

の建設が進められた。建立年代は明らかではないが、昭和四八年（一九七三）から始まった発掘調査の結果、金堂、回廊、門、塔などの遺構が見つかった。



豊岡市出石町宗鏡寺の庭石
(但馬国分尼寺の礎石)



塔跡の西南隅礎石と心礎（右上の木の前）

（豊岡市歴史博物館―但馬国府・国分寺館提供）

あとがき

今回は、兵庫県内各市町との交流の中で、熱心に伊能忠敬測量隊の研究をされている方々と出会い、大変お世話になった。「豊岡市立歴史博物館―但馬国府・国分寺館」の加賀見省一さん、篠山市「伊能忠敬篠山領探索の会」の加賀尾宏一さん（当会会員）、宍粟市「山崎古文書同好会」の横井時成さんである。その活動を会報に紹介していただけだと願っている。（会報七三号に加賀尾宏一氏の「笹山領測量二〇〇年記念 伊能忠敬ミニフロア展」の紹介記事が掲載されている。）

現在、北海道から兵庫県までの伊能忠敬測量隊宿泊地の自治体に、記念碑等の所在調査をお願いしている。毎号三、四件しか紹介できない現状だが、この交流を契機に、伊能忠敬と地元との関わりを見直したいというお便りもいただいている。

「当市でも此の調査を機会に伊能忠敬測量隊一行の様子を子ども達や一般の人達に学習してもらうことを考え、学校等への出前講座などを実施したいと思います。また、本陣資料の古文書も再調査しながら、本陣跡に説明板などを検討しています。」

三月一四日、北陸新幹線（東京―長野―金沢）が開通した。金沢駅が一新され市民自身も驚いている。三月三〇日からはNHK朝の連続テレビ小説（朝ドラ）「まれ」がスタートした。輪島市が舞台と聞いていたので、オープニングテーマの背景に能登半島最先端の緑剛埼灯台が飛び込んできたのには驚いた。第四次測量平山郡蔵隊が歩いた断崖添いの道も見える。九月まで毎朝、ふるさとの岬を見て一日をスタートする「しあわせ」が続く。

（没後二百年記念誌編集担当 河崎倫代）

山武歳時記(八)

―歳神様を迎える―

「芝山町山田地区の農家」

江口俊子

今回、三百年の歴史のある集落にお住まいの瀬利家のお正月を紹介します。

千葉県山武郡芝山町山田地区で、成田空港から一〇キロのところにあり、現在戸数は五四戸です。この山田地区には、江戸時代の嘉永三(一八五〇)年より一六〇年間続く「あらい祭り(大根祭り)」があります。大宮神社の神主に子供たちが大根の輪切りを投げる神事や、男女の物

を大根で作り座敷に飾り、五穀豊穡、子孫繁栄を祈願する祭りです。

平成二十七年一月四日、私は瀬利家を訪れました。瀬利家は三百年前から、この山田地区に定住している農家です。当主は瀬利信雄氏(八十歳)です。

現在の家は一二〇年前に建てられました。家の前の水田には七反の田があり、今は五反の水田で、五一〇キロの収穫があります。

瀬利家の門には門松が立ててあり、どつしりとした造りの母屋の玄関には注連縄飾り、そして通された座敷には立派な神棚と仏壇が目を引きました。

神棚には、歳神様のお供えである鏡餅、氏神である大宮神社の守護札があります。

瀬利家の宗教は真言宗で、成田山新勝寺の末寺である真福寺の檀家です。

仏壇にはダイダイをのせた鏡餅、お神酒、ご先祖が彫られた恵比寿、大黒天も置かれてありました。

歳神様を迎える準備と、お正月の過ごし方を瀬利家に聞きました。

十二月二十八日 新藁でしめ縄を作り玄関、神棚に飾ります。

十二月三十日 多古町などの親戚五組が集まって、鏡餅、のし餅を作ります。その日の内に、鏡餅をお供えします。

平成二十七年元旦 神様、仏様を拝み、

家族一同で屠蘇、おせち、雑煮をいただきます。

一月二日 芝山仁王尊へ初詣。

一月七日 七草粥をいただき、正月の飾りを仕舞います。

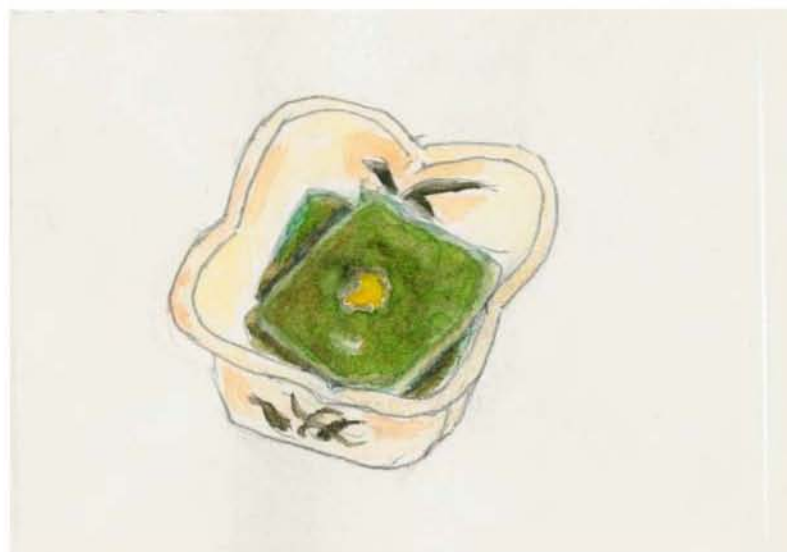
一月十一日 鏡開きで餅を割り、日に干し、のちに、「あられ」に加工します。



身近な材料で作る「おせち」：ヤーコンの煮物、キクイモのキンピラ。イワシのゴマ漬けは柿酢で味付け。

今回、おせちと雑煮を瀬利家の長女である淑恵さんに作っていただきました。

「昔の農村では、都会と違っていろいろな物を取り寄せたりはしなかった。とにかく身近であるもので料理するのが基本です。おせち料理も、身近で手に入る物でつくりました。」と淑恵さ

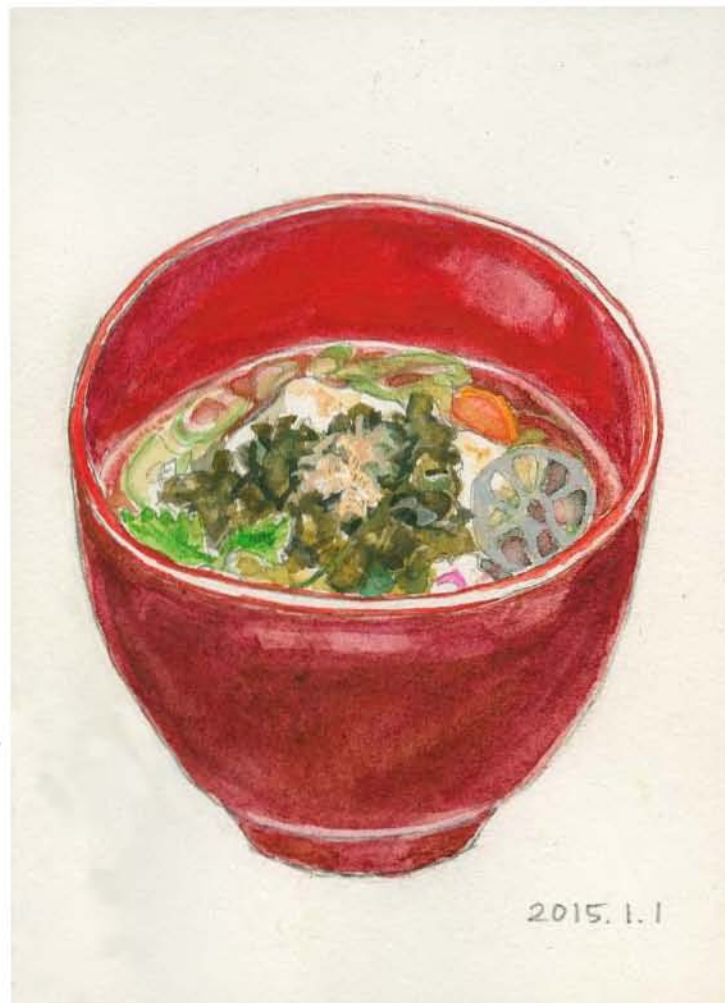


カイソウ（海草）

カツオの削り節をのせ醤油を落として食べる。

んがいわれました。
山武地方ではおせちに欠かせないものが、「イワシのゴマ漬け」と「カイソウ（海草）」です。イワシのゴマ漬けは九十九里の海で獲れるカタクチイワシに、黒ゴマ、ユズ、トウガラシをまぶしたものです。
カイソウはツノマタ（海草）をよく煮溶かして、青ノリを振り入れ固めたものです。
次に雑煮です。山武地方のお正月には、無くてはならないものが、ハバノリの入った「ハバ雑煮」です。ハバノリはよくあぶって、餅の上に振りかけます。

ハバノリのことを作家の高橋治氏が『大地が厨房だ』の本の中で、
「ハバをどう説明しよう。ワカメとノリの間とでもいおうか。しかし、どちらにもない野性味、歯ごたえ、口腔中に広がる海の香気、ハバはしたたかなまでにハバだと言いたいようがない。野武士を思わせる味」と書かれています。
私は山武市に移り住んで十三年、初めて瀬利淑恵さんの作られた雑煮にハバノリをかけていただきました。ハバノリは五枚四千元と高い値段でした。ハバノリが手に入らない家では、



ハバノリ雑煮

ハバノリは房州の天津で採れるが、千葉県では山武地方の人たちに好まれている。

大根葉を干葉にして、ハバノリのかわりに雑煮にのせました。我が家でも大根葉を干して、干葉にし、ハバノリと一緒に餅にかけました。
今回、瀬利家のお正月の過ごし方を見聞きしますと、稲作の神様である歳神様をお迎えするための祝いであり、全ての源は米作りにあります。昔から家内安全、五穀豊穡を願う思いが、信仰され続けてきたのだと思いました。
伊能忠敬が少年期を過ごした山武周辺の風習・風景を紹介しました。
二年間にわたり山武歳時記を読んでいただきました。ありがとうございました。了

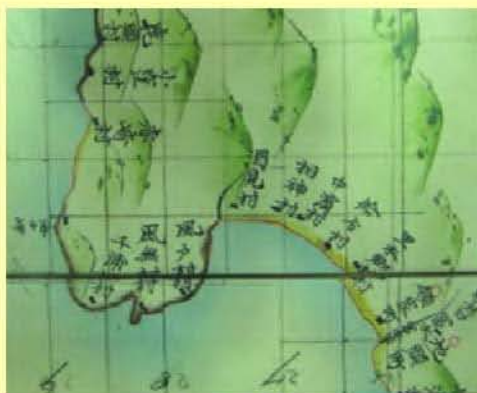
石川県支部ニュース

加賀藩測量の足跡をたどる(三)

相良 文昭

はじめに

二〇一四年九月十五日(月)、朝八時半に金沢駅西地区にある大型スーパーの駐車場に集合し、第三回の探訪に出发した。今回は、伊能忠敬本隊から分かれて、能登半島西岸部(通称「外浦」)の手分け測量に当たった平山郡蔵隊(三名)のコースで、羽咋郡赤住村(志賀町赤住)から鳳至郡深見村(輪島市門前町深見)まで北上した。参加会員は、河崎・室山・相良の三名である。なお、文中のかっこ書きは現在の地名を記している。



地頭町～鹿頭村
(全国巡回フロア展 in 金沢工業大学)

一、福浦湊・高橋屋吉右衛門(7/7)『測量日記』(以下、『日記』)では、大忍(念)寺新村(志賀町高浜町)を

出發後、赤住村(志賀町赤住)の久兵衛宅にて、休憩をとっているが、その場所の特定には至らなかった。なお、測量隊に関する地元史料である田中文庫『真銘覚書』では、久兵衛ではなく、久右衛門と記されている。それをふまえて、『志賀町史 資料編』第二巻をみると、時期は若干ずれるが、赤住八幡神社の棟札に、宝暦二年(一七五二)肝煎久右衛門・組合頭久兵衛、天保七年(一八三六)組合頭久右衛門などの名前を確認することができた。

この日、平山隊は福浦湊(志賀町福浦)の高橋屋吉右衛門宅に宿泊している。しかし、現在の住宅地図や、『富来町史 続資料編』に収められている近代の船宿の所在地図で高橋屋の名前を確認することはできなかった。『日記』に、「津軽から長門下関の間の第一の湊なり」と書かれた福浦湊は、リアス式海岸の二つの入り江から構成される天然の良港であり、古代、渤海使の出港地「福浦津」「福浦泊」としても知られた歴史がある。なお、福浦港は明治三十二年(一八九九)の大火により、多くの資料が失われている。その中には高橋屋につながる資料があったのかもしれない。

我々は、南側の台地の先端に上り、旧福浦灯台(県指定史跡)を見学した。明治九年(一八七六)に建てられ、昭和二十七年(一九五二)まで日本海の



旧福浦灯台
(高さ5m内部は三層)

交通を見守り続けた日本最古の木造洋式灯台である。起源は古く、慶長十三年(一六〇八)に日野長兵衛が航行する船の安全のために篝火を焚いたのが始まりとされる。元禄年間に灯明堂が建てられ、日野家が代々灯明役として守ってきたという。現在の灯台も日野家が建造したものである。灯台に向かう道は狭く、小さな畑が灯台のすぐ傍にまで作られていて、天然の良港ならではの厳しい生活環境がうかがえた。展望台からは、外海の荒波にもかかわらず、穏やかな港内の様子を確かめできた。



急崖を背にした福浦津

二、地頭町・室屋利左衛門(7/8)この日、平山隊は地頭町(志賀町富来地頭町)の室屋利「理」左衛門宅に宿泊している。『日記』には、福浦湊から地頭町に辿り着くまでの間、生神村(志賀町生神)で鶴嶋・織子嶋(機具岩)を見たことが記されており、現在は観光名所となっている。次いで、七海村を過ぎ、領家町(志賀町富来領家町)領内の荒木崎を通って富来川河口付近まで測量している。『日記』に、荒木崎は「これより大難所」とあり、冬は通行できず、夏でも満潮の時は通行できないとある。現在トンネルが開通して安全に通れるが、海側は急峻な崖になっている。『日記』では、平山隊は海岸を通って測量したと書かれている。



現在の荒木崎

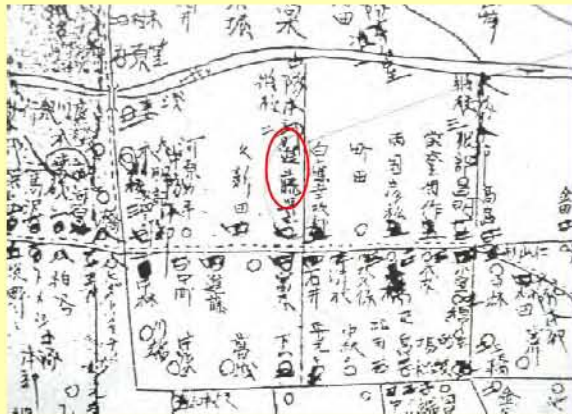
遠方に高爪山(別名大福寺山・能登富士)が見える



平山隊宿所—室屋（進藤家）
跡地の「ヤマモト」洋品店

富来川の河口付近は領家町領で、北西方向に砂浜を形成していた。桜貝などの歌仙貝が打ち上げられることで有名な増穂ヶ浦海岸である。『日記』にもあるように、富来川を挟んで北側に領家町、南側に地頭町の集落があり、中世の時代に荘園が領家方と地頭方に下地中分された結果、地名として今に伝えられたものである。

室屋家跡地には、現在、「ヤマモト」洋品店がある（会報六十三号の河崎報告。今回は、室山会員の知人で、近くの本光寺の佐藤義裕住職に話を聞くことができた。それによると、室屋はかつて本光寺に隣接してあった妙光寺という寺の分家筋で、進藤の姓を名乗り戦時中まで居住していたが、後に地頭町から退去し、その跡地にまず北村家、ついで今の山本家に移り住んだ



昭和15年頃の地頭町—進藤家（室屋）、
裏を富来川が流れる

らしい。後日、本光寺からいただいた昭和十五年（一九四〇）以前と思われる住宅配置図（手描き）コピーを確認したところ、進藤の名を確認できる位置は、現在の「ヤマモト」洋品店の場所であった。ようやく、地頭町における平山隊の宿所が特定できた。

三、鹿頭村・木下彦助（7/9）
この日、平山隊は、地頭町を出立後、風無村（志賀町西海風無）の畑中文四郎宅で休憩をとっている。現在も、西海神社の隣に畑中家が存在する。畑中さんと話をすることはできたが、有力な情報を聞くことはできなかった。『富来町史 資料編』では、文化十四年（一八一七）に、風無村の組合頭筆頭に文

四郎の名を確認できる。また、『富来町史 通史編』には、畑中文四郎の子孫として、明治期西海村初代村長を務めた同名の人物（一八五三—一九一〇）がみられる。畑中家の前の小路を抜けると急崖になっていて、眼下に富来漁港があった。



西海神社

平山隊休所
畑中家



この日の宿である鹿頭村（志賀町鹿頭）の木下彦助に関しては、『富来町史』等では確認できなかった。鹿頭の住宅明細図に木下姓の家が一軒確認でき、訪ねたが、留守で話を聞くことはできなかった。



平山隊宿所推定される木下家

なお、鹿頭へ向かう途中、『日記』に出てくる千浦村（志賀町千浦）の先にある「あま崎」（海士岬）に立ち寄った。『日記』には「この辺り第一の出岬なり」とある。富来川河口の北西に広がる増穂ヶ浦海岸から西に突き出て小さな半島を成す西端に位置しており、現在には標高のある海岸台地に海士埼灯台が立ち、比較的平坦な海岸が広がっていた。

四、黒嶋村・森岡屋又四郎(7/10)
『日記』では、平山隊はこの日、
村(輪島市門前町、**劔地**)の清兵衛宅で
休憩をとり、**黒嶋村(同市門前町、**黒島**)**
の森岡屋又四郎宅に宿泊している。
劔地村清兵衛については、『新修門前
町史 資料編3 近世』でその名を確
認することができた。享保五年(一七
二〇)組合頭とあるが、安永六年(一
七七七)には、**馬を一疋保有し、寛政
六年(一七九四)には質商売をするな
ど、多角経営を行う村役人であったよ
うだ。**清兵衛家についての情報を知っ
ているらしい河崎支部長の知人の家を
訪ねたが、留守で会えず、**跡地の特定
はできなかった。**
この時点で午後の時間をかなり回っ
ていたため、**黒島方面へと急いだ。**途



海士崎灯台
太陽光発電パネルが並ぶ

※このレンズは、もとは北海道の宗谷
岬灯台(明治十八年初点灯)に設置
されていたが、明治四十四年の山火
事で灯台が焼失し、損傷したレンズ
は修理して、**猿山岬灯台**に使用され
たものである。それが能登半島地震で
二度目の被災。明治期のフランス製
レンズという歴史的価値と被災遺物
という二面性を持った『歴史の語り
部』的な存在である。(河崎)



中、道の駅赤神に立ち寄ると、中には
近くの猿山岬灯台で使用されていたフ
ランス製の大型レンズが展示されてい
た。これは大正九年(一九二〇)初点
灯以来使用されていたが、平成十九年
(二〇〇七)の能登半島地震により破
損したため取り外されたもので、海上
保安庁の好意によってここに展示され
ることになったという。思わぬところ
で貴重な文化財にめぐり会った。

我々は黒島の先の道下(とうげ、輪
島市門前町道下)にある、蕎麦道場を
併設した蕎麦屋に入り、地元の名物で
ある、山芋を繋ぎに使う門前蕎麦を食
べ、黒島に戻った。
黒嶋村は加賀藩領ではなく、幕府領
(天領)であり、多くの廻船業者が居
住し北前船を経営して能登外浦地域で
は最も栄えた土地柄であった。森岡屋
又四郎については、資料でもその名を
多数確認することができた。現在、森
岡家は他県に引っ越しており、普段は
空き家である。探訪の前日にたまたま
家人が帰っていたが、我々は会うこと
ができなかった。森岡家の真向かいに
住む高島さんに伺った話では、現在の
家屋は、二十五年ほど前の火事の後に
建て替えられたものであるとのことだ
った。
また、先祖が曹洞宗の大本山惣持寺
(総持寺)の縁で奥州の盛岡(岩手県)
から能登に移り住んだ際、森岡の姓に
変えたとのことだった。『日記』にも記
される惣持寺は、現在も「**總持寺祖院**」
として黒島の東方約三・三キロの輪島
市門前町門前にあり、多くの禅僧の修
行道場となっている。
森岡屋は享保八年(一七二三)に総
持寺の門前から黒嶋村に移り、惣持寺
御用の廻船業を始めた。「**総持寺御用鑑
札**」や延享三年(一七四六)から嘉永二
年(一八四九)までに造船された二〇

なお『黒島村小史』でも、森岡屋又四
郎の名が記される資料を多数確認でき



平山隊宿所・森岡家



森岡家前の通り
能登半島地震で
倒壊・半壊した家屋が多かった

艘の「造船作業帳」などの資料を保存し
ており、その一部は近くの黒島天領北
前船資料館に展示されている(『歴史
の道調査報告書 第6集 海の道と川
の道・補遺』)。我々は同館の管理にも
関わる高島さんのご好意により、中を
見学することができた。

た。これによると、天保九年（一八三八）幕府巡検使の能登巡検の際、同家は脇本陣の一つとなり、安政五年（一八五八）幕府外国奉行巡検の際は、目付役人の休憩所となり、また村役人としては、嘉永六年（一八五三）の文書で組頭であることがわかった。

さらに、『石川県史 第参編』に、玦トという俳人について、その姓は森岡名は又四郎と紹介されている。その人物は寛政十年（一七九八）に亡くなっており、息子の玻井が父の三回忌にあたり、追悼句集を編集しているという。この玻井が、享和三年（一八〇三）に平山隊が宿泊した時の森岡屋又四郎であると考えられる『黒島村小史』。忠敬だったらきつと宿主との会話が弾んだに違いない。



ところで話は戻るが、『日記』ではこの日、鯛地村の手前で二つの岬名が出てくる。前ヶ浜村（志賀町前浜）の玄徳岬は現在の地図上にも確認できるが、深谷村（志賀町深谷）の天狗岬は確認できない。ただ、鯛地向かう手前に、関野鼻という名所があり、『能登志徴』によると、このあたりの海岸では天狗爪と呼ばれる石が採取されていたとされる。関野鼻と天狗岬を直接結びつける資料は確認できなかったが、その石がとれる岬として、当時は天狗岬と称していたのかもしれない。



※写真のように、海に突き出た岬が天狗の鼻のように見えることから「天狗岬」と呼ばれていたのではないだろうか。現在の呼称「関野鼻」にも通じるように思う（河崎）。



*関野鼻から見た「ヤセの断崖」
松本清張『ゼロの焦点』のラストシーンが…（河崎）

平山隊は翌日、黒嶋村から猿山岬を越えて皆月村に向かうが、その手前の深見村で昼休憩を取っている。次回の調査は皆月村から始める予定であるため、今回、あまり時間は無かったが、深見（輪島市門前町深見）まで足を延ばした。

深見村は、黒嶋村から八ヶ川を渡り、鹿磯村を経た北方、猿山の手前の入り江に面している。平山隊はこの名兵衛方で休憩した。名兵衛の名は、『新修門前町史 資料編3 近世』でいくつかわか確認でき、時期はかなり遡るが、正徳六年（一七一六）には「舟本」として漁場への網下しを申請しており、漁業

を営む船主であったと思われる。『日記』によれば、猿山の裾は大難所のため、船で測量したとある。その船はおそらく主に漁業を生業とした深見村で調達したものであろう。名兵衛宅の現状については情報がなく確認できなかった。我々は深見の手前の海岸道付近から、中腹に灯台が見える猿山の遠望を写真に納め、帰路についた。

この辺りに猿山岬灯台が見える



あとがき

初めて図書館での事前調査を経験して探訪に臨んだが、文献調査は総じて難しく感じた。それだけに、『日記』中の人名や地名が、文献資料や現地探訪で見つかったと、感慨もひとしおであった。

伊能忠敬出生の地 九十九里町で講演会開催

高宮 勲

昨年末、渡辺名誉代表から房総地区で勉強会を立ち上げるという案が出された。早速九十九里地区でただ一人の会員である、河野時巧（小関家の菩提寺・妙覚寺住職）さんを訪ねてお願いしました。河野さんから、九十九里町には会員数が五十名程の九十九里郷土研究会があり、活発に活動されているとの情報をいただきました。

勉強会開催の手始めとして伊能忠敬研究会と郷土研究会との交流会を持つて欲しいと提案したところ、河野さんから郷土研究会の齊藤会長にその旨をお伝え願ひ、交流会が固まった。齊藤会長から年度初めの総会の記念講演に是非渡辺名誉代表に講師をお願いしたいし、その後で交流会を行いたいとの意向が示され企画が確定した。

講演会は四月二十五日の午後、九十九里町の中央公民館で開催。講演会に先立ち折角の機会なので山武郡市近隣の伊能忠敬研究会の会員に、講演会及び交流会への参加を募った処、会員のご家族を含めて一五名の方々が出席したので聴講者は合せて五〇名程であった。

講演会は戸村茂昭氏による伊能忠敬入門と題した動画上映で幕を開ける。

動画の内容は

- ・ 生い立ち（生誕地編は既に聴講の皆さんは詳しいので省略）
- ・ 佐原での事業化時代
- ・ 黒江町での天文暦学修業時代であった。



講演風景

引き続き渡辺名誉代表による「あまり知られていない伊能忠敬の話」と題して

- ・ 黒江町く浅草測量図
 - ・ 測量実現の恩人で、仙台藩上級藩医桑原隆朝
 - ・ 稲生勘兵衛家のこと
 - ・ 高宮家の話
 - ・ 神保家のこと
 - ・ 第一次測量のあらまし
 - ・ 伊能北海道図は間宮林蔵の制作
 - ・ 分らない事はまだ沢山ある
- などであった。



講師渡辺名誉代表

九十九里町は忠敬翁生誕の地であるため、皆さんの関心度が高く、講演中でも質問が出た。講演会終了後有志による交流会が行われた。

伊能忠敬研究会より一二名、郷土研究会より九名合計二十一名が出席した。自己紹介から始まって、お互いの交流が出来て大変有意義な会であった。郷土研究会の会員は口々に大変勉強になりましたと喜んでる様子だった。

かつて九十九里町誌編集委員会委員長であった木島里八先生は、故安藤由起子さんとの交流を懐かしくお話された事が印象的だった。九十九里でも忠敬を勉強する雰囲気、ますます盛り上がり始めた事を感じた。

今回のような勉強会を伊能忠敬研究会の会員を中心として、一般の方々にも広く呼び掛け継続開催できればよいと思っている。

ふるさと発見・歴史を語る会

「伊能忠敬とかほく」

寺口 学

伊能忠敬測量隊の宿泊地の一つ石川県かほく市高松で四月五日（日）、「伊能忠敬とかほく」と題した講演会が開催されました。

会場となった「たかまつ まちかど交流館」はNPO法人が運営する地域の交流施設で、二ヶ月に一回、「ふるさと発見・歴史を語る会」というイベントが行われています。

講演会は、その七四回目のテーマとして行われたもので、市内外から集まったおよそ三〇人を前に石川県支部の河崎倫代・寺口学両会員が語りました。





会員だより

○伊能三三代さん（北海道札幌市）

北海道特集はとても興味深く拝見しました。同時に図の美しさに感動しました。私は障害者の就労施設の所長をさせて頂いています。生産活動としてアクリル羊毛で様々なスポンジを作っています。4月に札幌地下歩行空間で販売をしますが、そのディスプレイとして大きな「蝦夷図」を羊毛で制作しました。札幌の皆様に見ていただこうと考えています。6月の総会に出席予定です。皆様にお会いできることを励みに頑張ります。

○打田元輝さん（北海道札幌市）

間宮特集ありがとうございます。今年は総会に出席します。

○川上清さん（茨城県水戸市）

3月14、15日に第4回水戸観梅ツアーウォークを行います。梅の名所の偕楽園に全国より多くのウォーカーを迎える準備に余念がありません。

○石嶋博行さん（千葉県銚子市）

ダックツアー（水陸両用バス）の運行が水の郷さわら発着で始まりました。

○石田定雄さん（千葉県旭市）

会報のカラー化、内容もさることながら、すばらしい出来栄え、楽しみながら拝読しております。

○柏木隆雄さん（千葉県市川市）

小説「林蔵と秀蔵」のBOOK枚、書き上げました。

○河野時巧さん（千葉県山武郡）

4月に講演会が開催できそうです。その節はよろしくお願い申し上げます。

○田野圭子さん（千葉市）

大河ドラマの署名を日本中から頂いたのですが、実家の父が亡くなり佐原に届けられませんでした。総会の時にお届けします。

○塚本倫正さん（千葉県成田市）

忠敬旧宅も修理完了。観光客が増えました。

○戸村茂昭さん（千葉県山武市）

能登・輪島の白米千枚田の観光をして来ました。その伊能測量隊の測線が、汀線ではあり得ないことを確認して来ました。

○前嶋初枝さん（千葉県東金市）

間宮か忠敬先生か「測量」の事実の検証、おもしろく感心しながら読ませて頂きました。さすが「研究会」です。

○井上靖子さん（埼玉県所沢市）

第75号北海道図と間宮林蔵は圧倒されました。私事ですが、忠敬旧宅修復なった写真は感動でした。あの書院で長男健は生まれました。戦後1年目の終戦記念日8月15日生まれです。この修復なった旧宅が今後おだやかに引き継がれることを祈ります。

○前田幸子さん（東京都稲城市）

総会で皆様にお目にかかるのを楽しみにしております。

○山本公之さん（東京都小平市）

特に研究会のためになることもなく、平凡に楽しく行こうと思っております。

○秋間実さん（神奈川県逗子市）

87歳になり、ますます脚力が衰えてきていますが、大事な会合・会議には参加させてもらっています。総会、いまから楽しみです。

○寺口学さん（石川県かほく市）

近日、石川県支部の活動が地元紙で紹介されます。

○橋本茂さん（静岡県熱海市）

うみのホテル中田屋は、1815年12月17日に第9次測量にて御一行が

お泊り頂きました。公の為に生き、引退の年齢の50歳になられてから、私財を投げ打ち、全土を徒歩にて歩かれた生き方に感動致しております。趣味は日曜大工です。

○平岡佳子さん（京都府綾部市）

北海道別海に忠敬記念柱建立の時行きましたが、記念碑になりましたか？申請してから許可までに2年かかるということでしたが。

○松田昭二さん（京都府京丹後市）

長い間お世話になりましたが、老齢化が進み、お付き合ひできませんので退会いたします。

○田中精夫さん（鳥取市）

鳥取県における伊能隊の足跡出版に向けて調査中です。

○池田一樹さん（山口県宇部市）

2月に富岡八幡宮と忠敬翁の墓前に合掌いたしました。

○平川定美さん（長崎県佐世保市）

75号に伊能碑設立の記事ありがとうございました。



資料

「伊能忠敬測量隊の足跡をたどる」連載第十二回

伊能忠敬銅像報告書「伊能忠敬の足跡」の改訂増補版

監修 渡辺一郎

編著 井上辰男

【第七次測量】（九州一次の一・往路小倉まで） 自 文化六年八月二七日 至 文化六年十二月二九日

宿泊日・旧暦（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
------------	-----	--------	-----	---------	------

文化6年8月（1809）	二七	王子村	東京都北区	茶屋 扇子屋弥惣右衛門	八幡宮へ参詣し発足。都合上下十七人 王子村茶屋に集会。荒川大洪水にて川 留。恒星測定	九〇
	二八	岩淵村	同 北区	本陣名主問屋新藤 百姓四郎兵衛		九〇
	二九	川口宿	埼玉県川口市	鍋屋文左衛門	荒川洪水に付町見して渡る	九〇

文化6年9月（1809）	一	鳩ヶ谷宿	同 川口市	本陣舟戸喜市	午中太陽と恒星七星測る	八七
	二	大門宿	同 さいたま市緑区	本陣名主 問屋平左衛門 組頭源兵衛	恒星三星測る	八七
	三	岩槻城下	同 さいたま市岩槻区	本陣斎藤平兵衛	恒星五星測る	八八
		（11）		名主仙蔵		八八
		後手中食	同 蒲田市	名主藤内		八八
		先手中食	同 白岡町	本陣名主治平衛	恒星測定	八八
		（12）	同 白岡町	四郎兵衛		八八
		篠津村	同 白岡町	本陣名主治平衛		八八
		（13）	同 久喜市	名主芳右衛門		八八
		後手中食	同 加須市	名主千蔵		八八
		先手中食	同 加須市	本陣年寄惣八		八八
		（14）	同 加須市	名主善兵衛		八八
		騎西町	同 鴻巣市	名主孫兵衛		八八
		（15）	同 鴻巣市	名主六郎左衛門		八八
		先手中食	同 行田市	年寄本陣源三郎	恒星測定	八八
		（16）	同 行田市	元八		八八
		恩行田町	同 行田市	名主勘十郎		八八
		（17）	同 熊谷市	本陣武井新右衛門	恒星十余星測る	八八
		戸出村	同 熊谷市			八八
		中食	同 熊谷市			八八
		（18）	同 熊谷市			八八
		（19）	同 熊谷市			八八

十八		十七	十六	十五	十四	十三		十二			十一	十		九		八		宿泊日・旧暦(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号	
(26)	中食	(25)	(24)	(23)	(22)	(21)	中食	(20)	本隊中食	支隊中食	(19)	(18)	【支隊】	(17)	後手中食	(16)	後手中食							
追分宿	沓掛宿	軽井沢宿	坂本宿	同	同	松井田宿	妙義町	安中城下	板鼻宿	高崎城下新町	高崎城下新町	高崎城下新町	倉賀野宿	倉賀野宿	本庄宿	牧西村	深谷宿	新堀村字竈原		同	深谷市	立場茶屋 信楽家名源蔵	恒星測定	八八
同	同	長野県軽井沢町	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	群馬県高崎市	群馬県高崎市	同	同	同	同	同	同	深谷市	立場茶屋 伊勢屋弥平治	雨天逗留 雨天逗留 倉ヶ野宿より高崎城下迄測る。 倉ヶ野宿より高崎城	

宿泊日・旧暦(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
十九	中食 (27) 岩村田宿	同 佐久市	本陣安川長右衛門 本陣石橋屋八之助 龜谷元右衛門	恒星測定	九五
二十	中食 (28) 塩名田宿	同 佐久市	本陣丸山伝兵衛	千曲川を渡る。恒星測定	九五
二一	(29) 長窪宿	同 長和町	本陣大森久左衛門 本陣石合平右衛門	雁取峠を越す。恒星測定	九五
二二	(30) 和田宿	同 長和町	本陣永井十左衛門	忠敬他三名直に和田宿に至て下図推算。恒星測定	九五
二三	後手中食 先手中食 (31) 下原村諏訪餅屋	同 長和町	立場 小林伝之丞 土屋簾八 小口金左衛門 日野屋六兵衛	恒星測定	九六
二四	(11.1) 下諏訪宿	同 下諏訪町	本陣岩波太左衛門	同所逗留地図を成す 恒星測定	九六
二五	(2) 同	同	同	下諏訪宿より上諏訪宿、上桑原村追分 を歴て上諏訪神社迄測り参詣。恒星測定	九六
二六	(3) 上諏訪宿	同 諏訪市	本陣周屋兼 小平清右衛門	諏訪湖を測る。	九六
二七	(4) 下諏訪宿	同 下諏訪町	本陣岩波太左衛門	逗留測。後手、東堀村より岡谷村を歴 て新倉村鮎沢橋迄測る。先手、花岡村 より天竜川の源を歴て新倉村鮎沢橋迄 測る。御目付遠山左衛門尉、対州より 帰府に付本陣止宿となり、宿替え。恒 星測定	九六
二八	(5) 同	同	脇本陣丸屋要四郎	下諏訪宿より東堀村追分を歴て塩尻峠 迄測る。	九六
二九	中食 (6) 塩尻宿	同 塩尻市	出張茶屋伝治郎 銀杏屋佐市 藤屋勝治	塩尻峠より塩尻宿迄測る。	九六
三十	中食 (7) 洗馬宿	同 塩尻市	本陣百姓伝左衛門 本陣小林吉左衛門	恒星測定	九六
	本山宿	同 塩尻市	本陣小林吉左衛門		九六

文化6年10月(1809)										宿泊日・旧暦(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号		
一		二		三		四		五		六		七		八		九	
(11.8) 中食		(9) 中食		(10) 中食		(11) 中食		(12) 中食		(13) 中食		(14) 中食		(15) 中食		(16) 中食	
賛川宿		奈良井宿		福島宿		上松宿		萩原村		須原宿		野尻宿		三富野宿		妻籠宿	
長野県塩尻市		塩尻市		木曽町		上松町		上松町		大桑村		大桑村		南木曾町		南木曾町	
臨本陣賛川平右衛門		本陣龜子九郎右衛門		本陣村上弥惣右衛門		本陣白木郷左衛門		本陣藤田治郎兵衛		本陣木村平左衛門		本陣森徳左衛門		本陣島崎与治右衛門		本陣島崎吉左衛門	
賛川宿字下遠に材木改関所あり		鳥井峠越す		福島宿より木曾川沿い。恒星測定、曆局より用書一封を相届く。		福島宿入口に関所あり。忠敬他三名直に福島へ着て地図推算等をなす。恒星測定		上松宿字寝覚に臨川寺あり、木曾川眺望よし。恒星測定		当宿薩濟宗定勝寺へ立寄、唐画数品を一覧す。恒星測定。此所曆局と北極出地およそ同度分也。		忠敬他三名直に野尻宿へ行き地図をなす。恒星測定。此所深川宅と北極出地同度也。		恒星測定		宇恋野に鯉岩という大石道際にある。	
九六		一〇九		一〇九		一〇九		一〇九		一〇九		一〇九		一〇九		一〇八	
岩村城下中町		官腰宿		福島宿		上松宿		萩原村		須原宿		野尻宿		三富野宿		妻籠宿	
恵那市		木曽町		木曽町		上松町		上松町		大桑村		大桑村		南木曾町		南木曾町	
現金屋庄左衛門		本陣村上弥惣右衛門		本陣白木郷左衛門		本陣藤田治郎兵衛		本陣木村平左衛門		本陣森徳左衛門		本陣島崎与治右衛門		本陣島崎吉左衛門		本陣市岡長右衛門	
忠敬他三名無測量にて直に岩村城下へ入る。		より用書一封を相届く。		福島宿入口に関所あり。忠敬他三名直に福島へ着て地図推算等をなす。恒星測定		上松宿字寝覚に臨川寺あり、木曾川眺望よし。恒星測定		当宿薩濟宗定勝寺へ立寄、唐画数品を一覧す。恒星測定。此所曆局と北極出地およそ同度分也。		忠敬他三名直に野尻宿へ行き地図をなす。恒星測定。此所深川宅と北極出地同度也。		恒星測定		宇恋野に鯉岩という大石道際にある。		馬籠峠に尾州材木役番所あり。峠を下れば峠茶屋、此辺より恵那ヶ岳見える	
一〇八		一〇九		一〇九		一〇九		一〇九		一〇九		一〇九		一〇九		一〇八	
中津川宿		官腰宿		福島宿		上松宿		萩原村		須原宿		野尻宿		三富野宿		妻籠宿	
中津川市		木曽町		木曽町		上松町		上松町		大桑村		大桑村		南木曾町		南木曾町	
小桑作右衛門		本陣村上弥惣右衛門		本陣白木郷左衛門		本陣藤田治郎兵衛		本陣木村平左衛門		本陣森徳左衛門		本陣島崎与治右衛門		本陣島崎吉左衛門		本陣市岡長右衛門	
当所より曆局へ書状を出す		より用書一封を相届く。		福島宿入口に関所あり。忠敬他三名直に福島へ着て地図推算等をなす。恒星測定		上松宿字寝覚に臨川寺あり、木曾川眺望よし。恒星測定		当宿薩濟宗定勝寺へ立寄、唐画数品を一覧す。恒星測定。此所曆局と北極出地およそ同度分也。		忠敬他三名直に野尻宿へ行き地図をなす。恒星測定。此所深川宅と北極出地同度也。		恒星測定		宇恋野に鯉岩という大石道際にある。		馬籠峠に尾州材木役番所あり。峠を下れば峠茶屋、此辺より恵那ヶ岳見える	
一〇八		一〇九		一〇九		一〇九		一〇九		一〇九		一〇九		一〇九		一〇八	

二十	十九	十八	十七	十六	十五	十四	十三	十二	十一	十
(27)	(26)	中食 (25)	中食 (24)	後手中食 先手中食 (23)	(22)	(21)	(20)	(19)	後手中食 先手中食 (18)	(17)
赤坂宿	美江寺宿	河渡宿	加納町三丁目 御園町 竹尾町	二軒茶屋 細畑村 加納町三丁目	鷺沼宿	大田宿	御嵩宿(御嶽宿)	細久手宿	大津宿(大久手宿) 釜戸村字炭焼 藤村字深萱	大井宿
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
大垣市	瑞穂市	岐阜市	岐阜市	岐阜市	各務原市	美濃加茂市	御嵩町	瑞浪市	瑞浪市	岐阜県恵那市
本陣矢橋広助	本陣山本宇兵衛	本陣水谷善兵衛	松波藤左衛門 年寄横山七右衛門 篠田喜右衛門	五郎兵衛 松波藤左衛門	本陣佐倉屋岡右衛門	本陣福田治郎右衛門	本陣野呂弥五右衛門	本陣小栗伝之右衛門	加納屋三右衛門 平野屋弥左衛門 本陣保々市郎兵衛	本陣 高木屋伝右衛門
忠敬他四名は地図に先行、直に赤坂宿に至る。恒星六七星測定	十月六日浅草曆局より御勘定所へ差出す三分地図三枚、佐原より九月二十日の書状、中山道御用先へ駅次にて継送來り、当宿にて請取。恒星測定	鏡島村端甲山乙津寺(梅寺)へ立寄	逗留測、南広江町岐阜追分より岐阜町を歴て長柄川端迄測る。	恒星測定	忠敬他3名は地図に先行。勝山村、岩屋観音岩宿の中にあり。諸峠あり郡界、甚絶景也。恒星測定	御嵩宿出端に蟹薬師あり、大堂にて十四間。天台宗大寺山願奥寺真誠院。大田川(木曾川)渡る。恒星測定	諸木峠を越。井尻村字鬼門坊、和泉式部廟あり。	大雨逗留。地図を成す	忠敬他三名直に細久手宿に至て地図推算。琵琶峠を越す。恒星測定	十三峠を越。恒星測定
一一八	一一八	一一八	一一八	一一八	一一四	一一四	一一四	一一四	一一四	一一四

二六		二五			二四			二三			二二			宿泊日・旧暦(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
(3)	後手中食	(2)	後手中食	後手中食	(12・1)	中食	小林	(30)	同	同	(29)	支隊昼休	本隊中食	(28)	後手中食	先手中食	同	同	同
愛知川宿	四十九村	高宮宿	鳥居本宿	摺針峠	番場宿	醒ヶ井宿	柏原宿	今須宿	同	同	高田町	栗笠村	高田町	高田町	宇田村	垂井宿	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	滋賀県米原市	関ヶ原町	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
愛荘町	愛荘町	彦根市	彦根市	米原市	米原市	米原市	本陣伊東五郎三郎	本陣伊東五郎三郎	本陣伊東五郎三郎	本陣伊東五郎三郎	本陣庄六	佐藤与三郎	本陣庄六	本陣庄六	本陣庄六	本陣庄六	本陣庄六	本陣庄六	本陣庄六
本陣西沢甚五左衛門	庄屋	本陣小林太左衛門	本陣寺村忠助	本陣市川平右衛門	本陣市川平右衛門	本陣松井新助	本陣南部辰右衛門	本陣伊東五郎三郎	本陣伊東五郎三郎	本陣伊東五郎三郎	本陣庄六	佐藤与三郎	本陣庄六	本陣庄六	本陣庄六	本陣庄六	本陣庄六	本陣庄六	本陣庄六
先手、四十九村より愛知川宿を歴て山本村迄測る。観音寺立寄。恒星測定	多賀村多賀神社前より高宮宿多賀神社華表迄測る。高宮宿より四十九村迄測る。	恒星測定	先手、多賀神社へ参詣。					此本陣旧家にて十五代に及という。八代以前慶長五年関ヶ原役、東照神宮御成の由、神君の御踏石泰平殿の額あり。			本隊、高田町より沢田村迄測る。恒星測定	高田町押越村界より舟付村迄測る。	逗留測。高田町より養老滝迄測る。引						
一二五	一二五	一二五	一二五	一二五	一二五	一二五	一一八	一一八	一一八	一一八	一一八	一一八	一一八	一一八	一一八	一一八	一一八	一一八	一一八

文化6年11月(1809)											
四			三			二			一		
(10)	中食	小休	(9)	中食	(8)	(12, 7)	後手中食	先手中食			
大津宿	鳥居川立場	草津宿	石部宿	水口城下	土山宿	鎌掛宿	日野町	小井口村			
同	同	同	同	同	同	同	滋賀県日野町	同	同	同	同
大津市	大津市	草津市	湖南市	甲賀市	甲賀市	日野町		日野町			
本陣大塚嘉右衛門	健屋惣左衛門	本陣田中九蔵	本陣三大寺小右衛門	脇本陣升屋市兵衛	本陣土山平治郎	本陣藤屋權右衛門 升屋治兵衛	西本願寺末 清雲山興仙寺	庄屋勘右衛門			
暦局へ書状を出す。				此日より測量なし。	笹尾峠を越す。恒星測定	恒星測定	岡本村より上大窪町迄測る。	仁正寺村より上大窪町を歴て鎌掛宿迄測る。			
一一三	一一三	一一三	一一三	一一九	一一九	一一九	一一九	一一九			

宿泊日・旧暦(西暦)											
宿泊地											
現・市町村名											
宿泊宅											
特記・天体観測											
大図番号											
二七			二八			二九					
後手小休	後手中食	先手中食	(4)	中食	(5)	後手中食	先手中食	(6)			
西老鉢村	武佐宿	馬淵村	鏡村	桜生村字三ツ坂	武佐宿	八日市場	上小房村	岡本村			
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
近江八幡市	近江八幡市	近江八幡市	竜王町	野洲市	近江八幡市	東近江市	東近江市	東近江市	東近江市	東近江市	東近江市
井筒屋八十八	本陣下川武左衛門	庄屋平太	造酒屋林三郎兵衛		本陣下川武左衛門	四郎左衛門	敬念寺	本陣梅田伝左衛門 井筒屋弥惣宇衛門			
後手、観音寺へ立寄る。 天台宗徽山観音正寺、西国三十二番札所、本尊千手観音。街道測量より測り遠きにて帰る。	恒星測定	恒星測定	恒星測定	後手、鏡村より小篠原村 先手、三上村より小篠原村にて合測	恒星測定	武佐宿より金屋村三辻を歴て浜野迄測る。	金屋村三辻より上小房村を歴て岡本村迄測る。	八日市より南北二里程に百済寺村あり、天台宗百済寺御朱印あり。東三里斗に高野村あり、臨済宗永源寺御朱印あり。日本輿地図にあり。恒星測定			
一二五	一二五	一二五	一一三	一一三	一一五	一一五	一一九	一一九			

十		九			八		七		六	五		宿泊日・旧暦(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
(16)	後手中食	(15)	先手中食	後手中食	(14)	中食	(13)	中食	(12)	(11)	中食		伏見町	京都府京都市伏見区	丹波屋仁兵衛	下河辺外九名一同に京都一覽に行く。伏見へ間五郎兵衛書状届き居る。即伏見より間氏へ書状を遣す。	一三三
神戸村	住吉村	西宮町	下大市村	昆陽宿	半町駅	平尾村	郡山駅	芥川駅	山崎駅	淀城下							
同	同	同	兵庫県西宮市	同	同	同	同	大阪府高槻市	同	同	京都市伏見区						
神戸市中央区	神戸市東灘区	西宮市		伊丹市	箕面市	箕面市	茨木市		大山崎町								
俵屋久左衛門	茶屋茂左衛門	本陣村松儀左衛門	庄屋太右衛門	本陣川端七右衛門	本陣郷土梶山市三郎	半田屋伊兵衛	梶善左衛門	河内屋善兵衛	高槻屋五兵衛	河内屋市兵衛 糺屋五兵衛							
新在家村、酒造屋あり、次山という名酒出る。中村より熊内本村を歴て布引滝、男滝・女滝迄測る。恒星測定		西宮酒造四十四軒、名酒白菊小西善五郎。大坂間清市郎並吉兵衛を供とし尋来て一宿翌朝帰る。恒星測定	大鹿村より武庫川を歴て西宮町迄測る。	瀬川駅より石橋村を歴て麻田村陣屋前迄測る。石橋村より箕面川、猪名川を歴て大鹿村迄測る。	郡山駅より牧落村、半町村を歴て瀬川村迄測る。恒星測定	牧落村より平尾村、岩本坊を歴て箕面迄測る。	太田村字夙、右二町斗に継体天皇陵あり。	此日一手測。離宮八幡宮参詣、鳩石、妙喜庵一見立寄、天王山(明智光秀竊古戦場)へ登て山々を測り観音寺へ立寄る。恒星測定	恒星測定								
一三七	一三七	一三七	一三七	一三六	一三三	一三三	一三三	一三三	一三三	一三三							

宿泊日・旧暦（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
十一	後手中食 東須磨村字羽等	同 神戸市須磨区		兵庫津名所（和田ノ笠松、和田柳次佐の入江、古城跡池田信輝） 旧跡（一遍上人墓、琵琶塚、清盛石塔、萱御所跡、三ツ石、築島来迎寺、真光寺境内、差方塚、平経俊塚、本間重氏遠矢跡、妓王妓女塚、魚御堂）。 駒ヶ林村名所二葉松、浜の経橋、薩摩守忠度塚、俗の雑混寝説。 須磨寺へ測。 上野山福祥寺真言宗、宝物（青葉笛、高麗笛、教盛絵、教盛甲冑、弁慶若木桜制札、教盛和歌二首。古鐘） 西須磨村名所、光源氏旧跡須磨関屋跡、大政大臣師長塚、村上天皇社、片葉松、綱敷天神、松風村雨堂。 此村中に仲哀天皇陵あり、千壺といふ。	一三七
十一	先手中食 塩屋村	同 神戸市垂水区	但頭宗左衛門		一三七
十一	（17） 西垂水村	同 神戸市垂水区	郷土庄屋森本直五郎 大津屋庄三郎		一三七
十二	後手中食 明石城外西新町	同 明石市		人麻呂社迄測る。弘文学林氏碑銘、別人丸山月照寺禪宗、芭蕉塚、平忠度塚、当領儒臣梁田邦美蛭殿先生碑銘。	一三七
十二	先手中食 小久保村字中谷	同 明石市	兵庫屋徳兵衛	支隊	一三七
十二	（18） 大久保町	同 明石市	丸屋泉之助	恒屋測定	一三七
十二	中食 寺家村又は野口村	同 加古川市	伊左衛門	新在家村、義氏將軍塚あり	一三七
十三	（19） 寺家本町	同 加古川市	鍵屋権兵衛	坂本村、和泉式部墓、おり井の清水。大坂間氏より唐芦三十本届	一四一
十四	中食 魚崎村	同 高砂市	庄屋中村五郎右衛門	先手、魚崎村追分より、生石村石宝殿を経て曾根天満天神社迄測る。	一四一
十四	（20） 阿弥陀村豆崎	同 高砂市	中屋奥右衛門 和泉屋四郎太夫	忠敬は、石宝殿、曾根天満天神拝覽し、直に豆崎へ来て測量を書写す。	一四一
十五	（21） 姫路城下堅町	同 姫路市	本陣三木与三郎		一四一

宿泊日・旧暦(西暦)		宿泊地		現・市町村名		宿泊宅		特記・天体観測		大図番号	
十六		本隊中食 (22)	中太田村	同	太子町	建部内匠頭 大村弥吉		斑鳩寺又は太子寺へ立寄 坂部外四名直に正条駅を経て室津行て 止宿		一四一	
		【支隊】 室津	室津	同	たつの市			掛保川を渡。		一四一	
		本隊中食	正条駅	同	たつの市	井口市兵衛		正条駅より竜野城下を歴て北竜野村入 口迄測る。恒星測定		一四一	
十七		(23)	竜野城下横町	同	たつの市	壺屋六兵衛		西島屋町より今市村を歴て正条宿迄測 る。浅草曆局用状届、坂部請取。木 星、四小星測量		一四一	
		【支隊】	正条宿	同	たつの市	本陣井口市兵衛		正条宿より入野村字入鹿淵池迄測る		一四一	
十八		後手中食	入野村字入鹿淵池	同	相生市	茶屋鶴屋千右衛門				一四一	
		先手中食	横尾村	同	赤穂市	庄屋兵四郎				一四四	
		(24)	有年宿中町	同	赤穂市	本陣柳原与惣左衛門				一四四	
十九		(25)	三ツ石宿	岡山県備前市	本陣鈴木又三郎					一四四	
		後手中食	伊里中村	同	備前市	真殿小文治				一四四	
二十		(26)	西片上宿	同	備前市	小国六郎左衛門				一四五	
		後手中食	一日市村立場	同	岡山市東区	本陣難波三郎太夫		長船村枝舟山字天王(此村刀鍛冶長船 出生の所)		一四五	
二		先手中食	北方村	同	岡山市東区	組頭善四郎				一四五	
		(27)	藤井宿	同	岡山市東区	安井八郎右衛門				一四五	
		小休	藤原村	同	岡山市中区	百姓九之助				一四五	
二二		(28)	岡山城下下ノ町	同	岡山市北区	脇本陣福岡屋吉郎兵衛		浅草曆局へ書状を出す。恒星測定		一四五	
二三		中食	宮内村向畑茶屋	同	岡山市北区	林家喜三郎		備中国一宮古備津神社へ測る		一四五	
		(29)	板倉宿	同	岡山市北区	本陣東方平八郎				一五一	
二四		中食	岡村分郷岡田村	同	倉敷市	庄屋甫助		河部川舟渡し(松山川)		一五一	
		(30)	河辺駅	同	倉敷市	本陣難波忠七				一五一	
		中食	尾崎妹村	同	倉敷市	百姓泰藏				一五一	
二五		(31)	矢掛駅	同	矢掛町	松田屋滝三郎 平田屋平助		恒星測定		一五一	

宿泊日・旧暦(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
二六	中食 (1810) 七日市駅	同 矢掛町	実安平介 佐藤友右衛門 山田常右衛門	恒星測定	一五一
二七	中食 (2) 神辺駅	同 福山市	菅沼武十郎	神辺は庄のの名にて、元は神戸とも書く。天別豊姫社に付候所とも申候。唐土の書にも当国舟着の場を千奴鼻奥山と書候よし。恒星測定	一五七
二八	中食 (3) 福山城下深津町	同 福山市	鉄屋五郎右衛門	恒星測定	一五七
二九	中食 (4) 尾道浦薬師堂前	同 尾道市	本陣笠岡屋作右衛門 鉄屋庄十郎	恒星測定	一五七
三十	中食 (5) 東野村糸崎 三原町浜ノ町	同 三原市	本陣山科作兵衛	恒星測定	一五七
一	(1, 6) 沼田本郷駅	広島県三原市	本陣米田屋勇治	恒星測定	一六四
二	後手中食 新庄村	同 竹原市	飯田屋清蔵		一六四
二	先手中食 竹原下市	同 竹原市	組頭利兵衛		一六四
三	(7) 田万里村	同 竹原市	割庄屋原吉郎兵衛	恒星測定	一六四
三	(8) 西条四日市駅	同 東広島市	本陣吉田民治郎	木星測る。曇天不測	一六四
四	中食 (9) 上瀬野村枝久井原	同 広島市安芸区	助四郎		一六七
五	後手中食 中野村横路	同 広島市安芸区	本陣野村万右衛門	恒星測定	一六七
五	先手中食 奥海田村字畝	同 広島市安芸区	割庄屋野間清左衛門		一六七
六	(10) 海田市駅	同 海田市	行野屋清兵衛		一六七
六	(11) 広島城下堀町四丁目	同 海田市	本陣神保屋清治郎		一六七
七	【支隊】 可部町屋村	同 広島市中区	山沢屋榮蔵	恒星測定	一六七
七	中食 (12) 下安村字祇園	同 広島市安佐北区	油屋茂助	坂部外四名直に可部町に至る。	一六七
七	中食 (12) 広島城下堀町四丁目	同 広島市安佐南区	忠三郎	浜田三次街道境町追分より可部町を歴て下町屋村字横川追分測る	一六七
七	中食 (12) 広島城下堀町四丁目	同 広島市中区	山沢屋榮蔵	恒星測定	一六七

宿泊日・旧暦(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
八	中食 (13) 草津後田村	同 広島市西区	大野孫三郎	横川橋、川田川橋、已斐川橋を渡る。 着後、忠教他人名舟にて厳島神社へ参詣。	一六七
九	中食 (14) 玖波駅	同 大竹市	本陣山田治右衛門 大島弥三郎	止宿家作よし、庭松あり、元回三尺斗、高一丈程、左大開大枝、合二十四間、古木にて太く手強し名松也。	一七三
十	中食 (15) 関戸宿	山口県岩国市	本陣村尾仁右衛門	恒星測定	一七三
十一	中食 (16) 玖珂駅(新町)	同 岩国市	庄屋源兵衛		一七三
十二	中食 (17) 呼坂駅	同 岩国市	茶屋六之助		一七三
十三	中食 (18) 同	同 周南市	本陣河内屋藤右衛門	小雨、逗留地図	一七三
十四	中食 (19) 花岡駅	同 下松市	年寄原田八郎右衛門 脇本陣野村又右衛門 藤井藤兵衛		一七五
十五	中食 (20) 徳山町幸町	同 周南市	清水喜右衛門		一七五
十六	中食 (21) 富海駅	同 防府市	本陣石川十左衛門 庄屋吉武嘉平	恒星測定	一七五
十七	中食 (22) 官市町	同 防府市	兄部盤右衛門	坂部他4名、乗船直に三田尻へ、住吉社前より西宮市を歴て、佐波川向迄測る。東宮市の方に天満天神の社あり、別当大泉坊、円楽坊、天満宮殿回廊大に壮麗なり。	一七五
十八	中食 (23) 小郡駅	同 山口市	庄屋上田庄藏	造酒屋にて家作よし。諸侯の休所、娘菊女筆道によし、画もなす。	一七六
十九	中食 (24) 山中駅	同 宇都市	本陣三原助一郎	木星測る。 南部伯民より書状、並書届く。	一七六
			本陣三戸定右衛門	恒星と木星測る。	一七六

宿泊日・旧暦(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
二十	中食 吉見村	同 宇部市	庄屋善右衛門	二俣川、惣名厚東川という。舟渡し幅三十間。	一七六
	(25) 船木駅	同 宇部市	本陣三輪市郎右衛門 岩本屋重郎右衛門	忠敬持病。	一七六
二	中食 蓮台寺峠	同 下関市	茶屋治兵衛		一七七
	(26) 吉田駅	同 下関市	本陣恵美須屋和助 角屋五左衛門		一七七
二三	(27) 長府城下	同 下関市	本陣油屋善助	忠敬此日迄病氣	一七七
二四	(28) 同	同	同	小雪風。逗留地図を成す。	一七八
	中食 前田村	同 下関市	禪宗慈雲寺		一七八
	小休 伊崎浦	同 下関市	関屋松兵衛		一七八
	(29) 赤間関阿弥陀町	同 下関市	本陣伊藤奎之丞	此夜浅草曆局用状、備前国岡山へ届。それより駅次を似此所へ届く。	一七八
二五	(30) 同	同	同	逗留。尤木星測量の為なり	
二六	(31) 同	同	同	逗留。	
二七	(2、1) 小倉城下船頭町	福岡県 北九州市小倉北区	官崎要助	長府馳走船に乗り小倉城下へ着。	一七八
二八	(2) 同	同	同		
二九	(3) 同	同	同		

『伊能忠敬研究』投稿要領

①原稿の長さ

論文、報告、紹介、などは、本文・写真・図などを含めて一件につき刷り上がり八頁まで、各地のニュース・お知らせなどは刷り上がり一頁以内を原則とします。

＊刷り上がり一頁に入る文字数は約2000字（704字×三段または480字×四段）です。長い原稿の場合は連載として分割していただくこともあります。

②原稿のかたち

・本文（テキスト） 原則として、マイクロソフト社のワードなど一般的なワープロソフトで作成された電子ファイルとします。

・写真 一般的にJPEG形式またはTIFFまたはフォトショップのPSD形式でフォーマットされた電子ファイルとし、印刷サイズで350dpi程度の解像度のよい鮮明なものを用意してください。

＊印刷サイズが100mm×75mmで350dpiのカラー写真の場合、1MB前後のファイルになります。通常のデジタルカメラによつて5Mモード以上で撮影された画像ファイルで問題ありませんが、カメラ付き携帯電話で撮影された写真は無理な場合があります。わからない場合はL判（127mm×89mm）程度にプリントアウトした鮮明な写真でも結構です。

・図 写真に準じます。原図をコピーする場合は、なるべくスキヤナで撮った電子ファイル（JPEGフォーマット）にしてください。カラー数の少ない図はGIF形式のフォーマットでもかまいません。

③原稿の送り方

左記まで電子メール添付か、CDなどのメディアにコピーしたものを郵送してください。その際、挿入する写真・図がある場合はその位置、およびそのサイズを本文中に編集者がわかる形で記入しておくか、概略を記入した割付用紙を添付してください。また、題名、著者連絡先、原稿区分、刷り見込みページ数などを記入したメモ、または原稿整理カードも同時に送付してください。（詳しくは本誌六七号および六八号を参照）

送り先

・電子メール添付の場合 inohen@icloud.com

・郵送の場合 〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6 日本地図センター2階

伊能忠敬研究会「伊能忠敬研究」編集部

④注意事項

- ・編集途中での大幅な追加修正はお受けできません。完成原稿として投稿してください。
- ・図や写真の引用について、必要な場合は投稿する前に執筆者が責任を持って許可を取ってください。
- ・引用した文献等については本文末尾にリストや注記等で出典を明らかにしてください。
- ・原稿内容を編集委員会で検討し、不明な点や内容的に不備な点があった場合には執筆者に連絡し、修正または掲載を見送る場合があります。
- ・受理した原稿は原則として執筆者にお返しいたしませんので、必ずコピーをとっておいてください。

次号（第77号）は2015年10月発行 原稿×切は8月31日の予定です。

皆様からの投稿をお待ちしています！

伊能忠敬研究会 御案内

一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方にはどなたでも入会できます。

二、つぎのような活動を行っております。

①会報の発行 研究成果・会員活動情報など 原則として年三回発行

②例会・見学会の開催

③忠敬関連イベントの主催または共催

④その他付帯する事業

三、入会方法等 入会を希望される方は郵便振替で住所、氏名、電話番号、通信欄に専門、趣味、入会の動機、御意見などを書き添えて、年会費五千円を左記にお送り下さい。会計年度は、四月から翌年三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度の会報のバックナンバーをお送りします。

四、事務局所在地

〒153-0042

東京都目黒区青葉台4-9-6

日本地図センター2F

伊能忠敬研究会

電話・FAX 03-3466-9752

（留守の場合は録音テープに吹込んでください。）

事務局メール inohen@icloud.com

郵便振替口座 〇〇一五〇一六〇七二八六一〇

伊能忠敬研究会関係ホームページ

○「InoPedia（イノペディア）」伊能忠敬と伊能図の大事典

<http://www.inopedia.jp/>

○「伊能忠敬研究会・資料室」現存する伊能図の所在一覧、アメリカ伊能大図など地図および史料

<http://members.jcom.home.ne.jp/t-sakamo/>

○「伊能忠敬図書館」忠敬関係の文献、画像資料

<http://www.ttrm.or.jp/~koko>

編集後記 ◇前号が特集号であったため、掲載予定の記事が今号に繰り越されたものもある。これらの記事を執筆いただいた方には掲載時期が遅れご迷惑をおかけしたことをお詫びする。◇今号は締切を4月20日と速めたため、新たな記事の投稿が少なかったこともあり、原稿の見直しや確認に時間がかけられ、編集担当も投稿者とのやり取りを通じ楽しい時間を過ごさせていただいた。◇次号は10月の発行を予定している。今号で終了した連載記事もあるので、多くの皆様からの投稿を期待したい。（T・H）